

教職大学院

Newsletter

No. 207

福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学連合教職開発研究科 since 2008.4 2026.5.30(公開版)

「こころもち」を問いながら

— 子供の姿に学び続ける教師であるために —

福井大学教育学部附属義務教育学校 校長/附属幼稚園 園長 水野 涼子

新年度が始まり、約一か月が経とうとしています。新たな出会いと環境の変化に満ちたこの時期は、教師である私にとって、自らの在り方を見つめ直す機会でもあります。

4月3日、私は「こころもち」という言葉に出会いました。赴任した附属幼稚園で、村上副園長先生が「園から小へ接続できるといいこと」として、「(子供の)(保育者の)こころもち」と記されていたのです。日頃使っている「心持ち」とはどこか異なる響きを感じられました。その日以来、この言葉が頭から離れなくなりました。やわらかく、どこか曖昧でありながら、確かに大切な何かを含んでいる、そんな感覚が残っています。

私はこれまで、公立学校の校長として、「子供とともに授業をつくる」という視点から授業改善に取り組んできました。子供の姿に学び、その姿を起点に授業を問い直していく。その積み重ねが、教師と子供を含めた学校全体の学びを確かなものにしていくと考えてきたからです。

「子供の姿」を中心に語り合うスタイルを取り入れる中で、教師の姿も次第に変わっていきました。授業を見る位置、記録の取り方、研究会での語り、つまり、子供を「見取る」姿が変わっていったのです。やがて先生方の言葉の中に、「見取り」という語が自然に使われるようになりました。子供の姿を中心に語

り合うことを通して、同僚性と授業力が育まれていったように思います。

「今年は、子供を見取る力をつけたいんです」—昨年4月、採用3年目のA先生が、1on1ミーティングでそう語ってくれました。多くの人に授業を見てもらい、語り合いたいと、自ら進んで授業を公開していました。校長室にも足を運び、自分の実践を言葉にしていました。年度末にいただいた色紙には、「校長先生には、目の前の子供とともに学ぶ大切さと楽しさを教えていただきました。これからもそれを忘れずに学び続けていきます」と記されていました。その言葉に、私は大きな喜びを感じました。そして、あのかのA先生の言葉は、教師としての「こころもち」の表れであったのだと、今は感じています。

その後、福井大学教育学部附属義務教育学校・附属幼稚園に赴任し、教師の学びの在り方を改めて見つめることとなりました。義務教育学校では、協働探究学習が全教科・領域で展開されています。隣接する幼

内容

巻頭言	(1)
スタッフ紹介	(3)
院生自己紹介	(5)
インターンシップ/週間カンファレンス報告	(18)
ミドルリーダー/マネジメントコースだより	(22)
4月月間合同カンファレンス報告	(25)
お知らせ	(36)

幼稚園とも探究を軸としてつながり、12年間を通して子供と教師の成長を支える仕組みが構築されており、対話を中心とした学びが日常的に繰り広げられています。

中でも印象的なのは、子供も教師も「語る」姿です。それぞれが自らの考えや気づき、問いを言葉にし、他者と交わしながら学びを深めていく、その語りは、学びの質そのものを映し出しているように感じられました。さらに、その語りの内容自体が省察であり、探究の過程でもあることに気付かされ、深い感銘を受けました。

ある日の記録には、次のような言葉がありました。「本校は、子供たちの姿を見取することを大事にし、子供と共に教師自身も学んでいこうとする文化が根付いている」。また別の教師は、「今の子供たちの姿、それだけが確かなのだ。本当は子供たちの姿を見取れていなかった」と省察しています。これらの言葉は、私の心に深く響きました。そして、自らの教師としての「こころもち」を静かに問い返される思いがしました。

公立学校と附属義務教育学校・附属幼稚園では、規模も取組も異なります。しかし、共通して大切にされているものがあります。それは、教師の「こころもち」です。子供の姿を丁寧に見取り、その見取りをもとに実践し、省察へとつなげていく。この往還が語り合いの中で繰り返されることで、授業は磨かれ、教師としての専門性が高まっていきます。その基盤には、教師

の深い教材研究と子供や自分自身に真摯に向き合う姿勢があります。

先日、秋田喜代美先生の「保育のこころもち」という記事をいくつか拝読しました。その意味を言い表そうと試みながらも、一つの定義に収めることは難しく、むしろ、それぞれの実践の中で立ち現れてくるものではないかと感じています。

授業は、しばしば「生き物」に例えられます。それは、子供の「こころもち」が見えにくく、常に揺れ動くものであり、再現性の低い営みだからでしょう。だからこそ教師は、確かな見取りに基づいて実践し、省察を重ねながら、自らの理論を問い直し、修正し続けていく必要があるのだと思います。

教師の「こころもち」とは、目の前の子供の事実から学び続けようとする姿勢そのものではないでしょうか。子供の「こころもち」に寄り添い、実践し、省察する—その循環を愚直に積み重ねていくことが、教師の成長を支え、子供の学びを豊かにしていくのだと考えています。

私自身もまた、日々の実践の中で揺れ動きながら、この「こころもち」を問い続けていきたいと思います。教師として、校長として、学び続ける者として、自らの「こころもち」を大切にしながら、目の前の子供たちや先生たちと丁寧に向き合い続けていくつもりです。



スタッフ紹介

岐阜聖徳学園大学教育学部/教授 島袋 修 (しまぶくろ おさむ)



このたび、福井大学大学院教職開発研究科（連合教職大学院）の一員として学ばせていただくことになりました、島袋修です。現在は岐阜聖徳学園大学教育学部に所属し、代数学・応用数学

を専門としています。研究の中心は、代数的組合せ論、表現論、アソシエーションスキームといった分野にあります。日常の授業で直接扱われる内容ではありませんが、複雑に見える対象の中に潜む構造や関係を見だし、それを筋道立てて理解しようとするという点で、学校数学とも深くつながっている分野です。私は、数学の魅力とは、目の前の現象や問題をただ処理するのではなく、その背後にある規則性や構造に目を向け、定義・条件・根拠を明確にしながらい理解を深めていくところにあると考えています。

私の研究では、離散的な構造や対称性をもつ対象を扱うことが多く、最近ではゴードンゲーム、魔方陣、組合せ構造に付随する代数のモジュラー表現などに関する仕事を進めてきました。これらは一見すると学校現場から距離のあるテーマに見えるかもしれませんが、しかし、数学的に考える営みという観点から見ると、研究と授業には多くの共通点があります。たとえば、「どの対象に着目するのか」「何を前提としてよいのか」「その説明は本当に十分か」「別の見方をすると何が見えるのか」といった問いは、研究でも授業でも本質的です。特に、根拠を明らかにしながら説明すること、複数の見方を比較してよりよい考えに到達すること、曖昧な理解をそのままにせず定義に立ち返ることは、数学研究のみならず、これから

教壇に立つ人にとっても大切な力量だと思っています。

一方で、私は学校数学・算数教育との接点も重視してきました。算数教育に関わる活動の中では、ふだん自明だと思っている内容を改めて問い直すことの重要性を実感しています。たとえば、数とは何か、なぜその計算が成り立つのか、子どものつまづきはどこで生じるのか、説明は誰にとって分かりやすいのか、といった問いは、教材研究や授業改善の出発点になります。算数・数学の学びにおいて大切なのは、単に解法を覚えることではなく、対象の見方が変わること、自分の考えを言葉や式や図で表せるようになること、そして学ぶ者自身が「なるほど」と納得できることだと考えています。その意味で、数学の授業は知識の伝達にとどまらず、思考の質や表現の質を育てる場でもあるはずで

教職大学院では、現職教員の先生方や院生の皆さんと関わる中で、研究と実践を一方向につなぐのではなく、相互に往還させながら考えていきたいと思っています。大学で行っている研究成果をそのまま学校現場へ適用するというよりも、学校現場で生じている具体的な問いや困難から学び直し、そこに数学教育としてどのような本質的課題があるのかを共に考えることが重要だと思っています。授業づくり、教材研究、子どもの思考の見取り、説明や対話の質の向上、評価の在り方など、教職大学院で扱われる課題には、数学の論理性と教育実践の複雑さの両方が関わっています。だからこそ、単純な正解探しではなく、事実即して考え、複数の可能性を比較し、より妥当な判断を形成していく姿勢が求められるのだと思います。

また、教職大学院という場の大きな意義は、理論と実践、大学教員と現職教員、教科内容と学習者理解と

を切り離さずに考えられる点にあると感じています。私自身、数学を専門とする立場から参加しますが、教科内容の精密さだけでなく、子どもがどのように理解し、どこでつまずき、どのような支援によって学びが深まるのかという視点を大切にしたいと思っています。そして、算数・数学の授業を通して、子どもたちが論理的に考える力、自分の考えを他者に伝える力、他者の考えを受け止めて吟味する力を育めるような教育について、皆さまと共に学んでいきたいと考えています。

これからどうぞよろしくお願いいたします。数学を専門とする立場から、教職大学院での学びに少しでも貢献できるよう努めるとともに、私自身もまた、実践に根ざした多くの問いから学ばせていただきたいと思っています。子どもたちにとって意味のある算数・数学の学びとは何か、教師の専門性とは何かを、皆さまとご一緒に考えていければ幸いです。

岐阜聖徳学園大学教育学部/准教授 三島 晃陽 (みしま こうよう)



このたび3月に岐阜県教育委員会を早期退職し、4月より岐阜聖徳学園大学教育学部に着任いたしました。また、福井大学連合教職大学院では、コーディネーターリサーチャーとして関わらせていただくこと

になりました。

これまでの33年間、教諭として小学校5年間、中学校12年間（うち岐阜大学教職大学院2年間での学びを含む）勤務した後、知事部局、教育事務所、教頭、行政、岐阜大学教職大学院、校長、行政と、学校現場の内外双方にわたり計16年間経験を重ねてまいりました。こうした経験を生かし、今後は教育学部の学生とともに、「持続可能な社会の創り手の育成」について考え、学びを深めていきたいと考えております。

私の教育観は、これまでの出会いによって更新され続けてきました。勤務校ごとに出会った先輩や同僚との対話や実践の積み重ねが、学級経営、教科指導、生徒指導、研究推進に対する考え方を形づくってきたと感じております。変化の激しい現代においては、教育観そのものもまた更新され続ける必要があると

考えています。ここでは、私に大きな影響を与えた3つの転機について紹介いたします。

第一の転機は、岐阜市立陽南中学校での総合的な学習の時間「とびら」との出会いです。当時の後藤忠義校長先生の「「とびらは」は、生徒が好きなことを夢中になってやれるこんなに素敵な時間はない、思い切ってやりなさい」という言葉は、総合的な学習の時間の認識を大きく転換させました。3年間の学びの集大成である3年生が、個人探究ができる資質・能力を育んでいく研究でした。そこでの、自分の興味関心のある課題に没頭する生徒の姿は今も強く印象に残っています。8年間この学校で勤務できたことは、私の教育観の原点となりました。

第二の転機は、岐阜大学教職大学院の初年度に1期生として2年間学修できたことです。陽南中の最後の2年間のタイミングで、これまでの自分の実践を俯瞰できたこと、また理論と実践の往還ができたことは貴重な時間となりました。原田信之先生のゼミで総合的な学習の時間について、理論的な裏付けができたことで、これまでの実践を肯定的に捉え直すとともに、今後の方向性を見いだすことができました。

第三の転機は、郡上市立郡南中学校で校長として勤務した経験です。そこで改めて気付かされたのは、生徒の存在でした。まさに、次期学習指導要領の改訂の柱ともなっている「多様性の包摂」です。学校だけ

で抱え込むのではなく、多様な他者と協働していく学校経営の必要性を強く実感しました。そこで、総合的な学習の時間を中核に据え、SDGsの視点を取り入れた教育課程を教職員とともに構築してきました。先生方には、この総合的な学習の時間のカリキュラムデザインを行うことで、教科指導が教科に閉じたものではなく、教科横断的な視点で考えられる資質を身に付けてもらいたいという願いがありました。また、生徒には多様な他者と協働して取り組むことができるように、地域の企業にも協力してもらい一緒に学びを進められるシステムを構築してきました。その結果、企業と協働して商品開発、郡南マルシェの開催、地域の魅力を発信できるようなサイクリング

ツアーの企画・実施ができるカリキュラムが生まれました。このような学びは、生徒の社会参画への意識を高めることにつながっていました。この3年間で、生徒の学びへの意欲や非認知能力の向上、教師の力量形成、地域との協働といった好循環が生まれました。学校は、生徒・教師・家庭・地域の連携によって支えられるものであることを改めて実感しています。

これから連合教職大学院や本学において、多くの方々との出会いを大切にしながら教育についての対話を重ね、自らの教育観をさらに深めていきたいと考えております。どうぞよろしく願いいたします。



院生自己紹介

ミドルリーダー養成コース1年/なのはなこども園 小林 佳美 (こばやし よしみ)

初めまして。今年度より、福井大学教職大学院ミドルリーダーコースに入学しました、小林佳美と申します。

出身は北海道札幌市で、短期大学を卒業後、幼稚園教諭として5年間勤務しました。その後は、結婚を機に福井県あわら市に住むことになり、子育てがひと段落した後、保育教諭として久しぶりに現場に復帰しました。あわら市で臨時職員や病院内保育園で勤務に就き、その後、社会福祉法人千寿会が「認定こども園たんぼぼこども園（当時は千寿たんぼぼこども園）」を新しく開園するというので、そこで保育教諭として勤務しました。7年ほど勤めた時、姉妹園として「認定こども園なのはなこども園」が開園し、そちらに異動し現在に至ります。

私は小さい時から「保育さんになりたい!」と思っていました。小さな子供が好きだったからです。親戚に小さな子供がいたわけでも、小さな兄弟がいたわけでもありませんでしたが、「子供相手の仕事がしたい」と思っていました。高校生になって自分の進路について考えた時に、本が好きなので図書館司書の道も考えましたが、やはり、小さい時からの夢であった保育の道に進もうと思い、保育科のある短期大学に進学しました。卒業後は保育士として保育園に就職

する道も考えましたが、縁があり、幼稚園教諭として仕事に就くことが出来ました。その当時のことは、数十年も前のことになるので詳しくは覚えていませんが、そこでの経験を現在の職場で生かすことが出来ました。

現在の職場であるなのはなこども園は、福井市の森田地区にあります。現在森田地区は宅地造成により人口が急増している地域です。中心となる森田小学校の児童数が1,100人を超える(2025年2月時点)マンモス校となっており、更なる増加が見込まれています。2035年頃には1,500人規模になると予測されています。児童増加に対応するため、新たな小学校(森田東小学校)の整備が進んでいます。

私が森田地区のたんぼぼこども園で勤務を始めたのが、2015年の4月からでした。まさに子供が増えてきて、保育園の数が足りず、森田地区に保育園を3園同時に開園した年でした。その園では7年間勤務し、その7年間はずっと未満児クラス(0歳児から2歳児)の担任をしてきました。初めて受け持ったクラスは1歳児クラスで、開園したばかりだったので、園児全員が新入園児。職員も初めましての方ばかりで大変でしたが、入園当初、保育室の入り口に向かって「ママ～」と涙を流しながら大声で泣いていた子が、

立派に卒園していく姿を見ると、その時の様子を思い出し胸が熱くなったのを思い出します。

2022年4月に姉妹園となる、なのはなこども園が開園し、私はたんぽぽこども園から異動し、なのはなこども園に勤務することとなりました。初めて受け持ったクラスも1歳児クラスで、7年前と同じ状況になりましたが、市立保育園が開園しそこから転園してきた子が多かったためか、比較的落ち着いていた感じがしました。その子供達も今年は5歳児になり、その成長を楽しみにしています。

なのはなこども園の園長先生が、長年、福井大学附属幼稚園に勤務していた関係で、福井大学の宮本先生がこども園に来園し、私達の保育を見て頂ける

機会が増えました。その中で自分の保育を振り返り、子供の見方、声かけの仕方など多岐に渡り、ご指導を受けました。その中で気になる子への対応の仕方やクラスの職員の声かけの様子など、私達職員の質問にも丁寧に答えて頂き、学びがたくさんありました。

私が教職大学院に入学して頑張りたいことは、いろいろな立場の先生方とたくさん話をして、自分自身の保育力の向上を目指していきたいと思っています。また、ミドルリーダーとしての役割など、はっきり分からないところもあるので、そのことも教職大学院で学んでいきたいと思っておりますので、ご指導のほどよろしくお願いいたします。

ミドルリーダー養成コース1年/越前町立宮崎中学校 内藤 元彦 (ないとう はるひこ)

今年で教職18年目となります。振り返れば、いつもなにかしらの悩みを抱え、それを学ぶことで乗り越えてきたように思います。初任校は、校舎から美しい海を眺めることができる越前中学校でした。まだまだ学生気分が抜け切れていない無鉄砲な若者で、とにかく若さと熱さで教科指導、学級経営に取り組みました。その後、朝日中学校に異動となりました。卓球部の顧問として毎週末、練習試合に明け暮れる部活漬けの日々を送っていました。そんな教職10年目に転機が訪れます。福井県英語教育研究大会鯖丹大会の授業提案者となったことです。研究テーマは「自分の気持ちや考えを生き生きと伝え合う生徒の育成」。それまでは、いかに教師がわかりやすい授業をし、生徒の知識・技能を伸ばすかばかり考えていた私にとって、どんな授業をすればいいのか分からず、何をやっても、目指す授業や生徒の様子とはほど遠い状況が続きました。しかし、たくさんの先生方からアドバイスを頂いたり、試行錯誤を重ねる中で、生徒にとって生き生きと活動したくなる活動とはなんだろうか、生き生きと安心して活動するためにはどんな支援が必要なのだろうかと考えるようになりました。この生徒視点への転換は、私の授業スタイルを徐々に変化させ、それに伴い生徒の活動に取り組む様子や雰囲気も前向きに、意欲的に変化をしてきたように思います。この経験は私にとって指導観を変える1つ目の大きなきっかけとなりました。その翌年、サウジアラビアのリヤド日本人学校に赴任しました。そこでは毎日20分間のEnjoy Englishタイムという時間が設けられていて、私は担当として活

動内容を計画することになりました。最初は英語の歌を歌ったり、英語を使ったゲームをしたり、絵本を読んだりする活動をしていましたが、1か月もしない内に、すぐに行き詰まりました。教科書や年間のカリキュラムといったものが無かったので、その場かぎりの一貫性や系統性のない学習活動になってしまっていたのでした。子どもたちも学習の見通しが持てず、その日に言われた活動にただ取り組むといった様子でした。子どもたちがもっと主体的に意欲的にEnjoy Englishタイムに取り組む方法はないかと、解決法を探し続けた末に、プロジェクト型英語学習という方法に出会いました。「アメリカンスクールで日本の遊びを紹介しよう」や「サブウェイで自分の好きなサンドウィッチを注文しよう」などのプロジェクトを立ち上げ、そのゴールに向けて、必要な語彙や表現を学び、技能習得のための練習を行いました。子どもたちはプロジェクトのゴール、つまり実際に英語を使用する場面や状況を意識することで、何のために学ぶのか、何を今学ぶ必要があるのかを意識し、その結果、Enjoy Englishタイムに以前よりもはるかに主体的に取り組むようになりました。英語を使う目的・場面・状況への意識が子どもたちの学習を主体的にさせること、学ぶ必然性や学習の見通しが子どもたちの学習意欲の向上につながることを、この経験から学びました。これが私の指導観を変える2つ目のきっかけとなりました。

そして、帰国後に赴任した宮崎中学校。ここでも様々な新たな壁にぶつかり、悩むことになりました。これまでは若手として、自分に任された仕事に全力

で向き合ってくれば良かったのですが、40代に近づき、いわゆるミドルリーダーの立場となり、校務分掌的にも、学年主任や生徒指導主事などの役割を担うようになりました。そして、その立場ならではの悩みが増えました。例えば、同僚性に関する悩み。いかに同僚の先生と教科指導や生徒指導、学年経営の目標やビジョンを共有することができるか、協働的なチームを作ることができるかなど、これまでとは違う視点の悩みを持つことになりました。また、生徒指導主事という学校全体の生徒指導全般に責任を持つ立場となったことで、あるべき生徒指導とはどのような形なのか、これまでの自分の実践は本当に正しかったのか、課題は何なのかを深く考えるようになりました。また、リーダーとしての学校全体に関わる仕事を優先するあまりに、個人の仕事である教科指

導がないがしろになってしまうこともありました。これまでの実践の蓄積でどうにか授業を成立させているときもありました。このままではいけない、なにかを変えなくてはという気持ちや焦りを抱くようになりました。

そんな教職18年目の今、教員人生の折り返しのこの時期に、今一度しっかりと立ち止まり、これまでの実践を振り返り、省察し、今後の教員人生における「核」となるものを見つけたいと思い、教職大学院の入学を決めました。4月のカンファレンスを終え、今抱えている様々な悩みも、ここからの2年間の学びできっと乗り越えていけると確信しています。これからの先生方との出会いや対話、そして学びをとっても楽しみにしています。よろしくお願いいたします。

ミドルリーダー養成コース1年/板橋区立上板橋第一中学校

小池 一隆 (こいけ かずたか)

はじめまして。今年度より福井大学連合教職大学院、ミドルリーダー養成コースに入学いたしました、小池一隆と申します。慌ただしく過ぎてきた14年間の教員生活を立ち止まって振り返るとともに、新たな挑戦の機会をいただけたことに深く感謝しております。今できる精一杯を尽くし、多くの皆様の力になれる教員を目指して精進してまいります。

私が教員になる前年、東日本大震災が起きました。この出来事は私の教員人生の土台となりました。自然の脅威の前に突きつけられた人間の限界、そして人の命の尊さと支え合うことの大切さ。何としてもこれらのことを次の世代の子どもたちに伝えていきたいと思い、理科の授業や道徳、学年集会など、折に触れて話をしてきました。

その具体的な実践の柱として長年掲げてきたのが、「東北地方への修学旅行」の実現です。震災学習と防災教育を軸に、生徒たちには被災地を自らの目で見るとして、「命を大切に作る心」や「他者に寄り添う姿勢」を育み、東京にいる自分たちに今何ができるかを主体的に考えてほしいと願ってきました。

しかし、その実現への道のりは決して平坦ではありませんでした。これまで複数回にわたり提案してきましたが、保護者の方の不安や教員間の合意形成の難しさから、断念せざるを得ないということが続きました。特に、放射線への不安に対し、数値や科学

的な根拠を示すだけでは十分に納得を得られないという現実と直面したことは、私にとって大きな教訓となりました。教育活動を形にするためには、目的の正当性だけでなく、関係者の抱える背景や不安に丁寧に向き合い、心を通わせながら納得を得るための「合意形成の力」が不可欠であることを痛感しました。

そして今年度、3校目にしてようやく東北地方への修学旅行を実現する機会に恵まれました。今の3年生が1年生の時の保護者会で自らの思いを伝えるだけでなく、これまでの失敗経験を糧に準備を重ねてきたことが、ようやく実を結びました。しかし、これがゴールではありません。今は、この「東北地方への修学旅行」を必ず教育的価値の高いものとして成功させるべく、同僚と密に協働しながら準備を進めています。

幸いなことに、現在の職場では本行事の意義が教職員間で深く共有され、学校全体で推進する体制が整いつつあります。単に当日の行程や事前学習、事後学習を工夫するだけでなく、「3年間」という時間軸の中で、東北という地をいかに学びの核に据えるか、1、2年生の段階から何を積み上げていくべきかを学年を超えて協議するなど、カリキュラム全体で教育効果を高めようとする組織的な流れに、本校の強い可能性を感じています。そして、このような学校、

同僚の方に出会えたことをとても有難く、心強く思っております。

これまでの経験を通じ、私は教育の質を高めるためには、個人の力量以上に「組織としての協働」や「合意形成の在り方」が極めて重要であると強く実感しております。

そこで、本大学院では、学校全体で新たな教育実践を創り上げる際、どのようにビジョンを共有し、多様

な意見を調整して実践へとつなげていくのか、その具体的な方法論を理論と実践の両面から学びたいと考えています。また、教員が失敗を恐れず、「前年度踏襲」という居心地の良さに甘んじることなく、安心して意見を出し合い挑戦できる組織風土をいかに形成するかという視点を深め、将来、学校全体を牽引できる実践的指導力を身につけたいと思います。

ミドルリーダー養成コース1年/滋賀県 葉山こども園 伴 広大 (ばんこうだい)

はじめまして。私は滋賀県栗東市立葉山こども園で勤務している伴広大です。まず初めに主体的で対話的で深い学び合いが教育現場・保育現場の重要なキーワードの一つであることは言うまでもありません。しかし、この学びを本気で実現するには何が必要なのか考えてみると、当時の私は明確な答えを出しきれませんでした。私は日頃、子ども達と関わる中で直接体験を大切にしています。なぜなら、自らの体験は他人から見聞した経験よりも遥かに心に残り、たくさんの方に繋がると考えているからです。そう考えた時、私自身が主体的で対話的で深い学び合いを体験したいと強く思い、4月から福井大学教職大学院のミドルリーダー養成コースに入学しました。

私の保育士人生は、平成20年からスタートし、主に4・5歳児の担任として過ごしてきました。この頃の私は、保育者が保育のねらいを達成できると考えた保育環境を整え、保育者から遊びを発信していくことが大切だと考えていました。特に運動会や発表会などの行事ごとで、保護者から「伴先生のクラス、凄かったです」と、言ってもらえることが保育に対する自信に繋がっていました。当時を振り返ってみると保育者の願いや集団の育ちを重視しており、子ども達一人ひとりの興味関心や願いを十分に受け止めることができていなかったと思います。平成29年人事異動に伴い、私は保育現場から療育現場に異動となりました。この出来事が私の保育士人生の大きな転機となります。今まで保育現場では、20人30人の子ども達を一人で担任するのが当たり前でした。一方で私が勤務する療育教室は、1グループ10人未満の小集団で行われ、尚且つ子ども1人に対して職員が1名、あるいは子ども3人に対し2人の職員で対応しており、少人数を相手に関わる事はそれほど難しいことではないと心の何処かで感じていました。しかし、その考えは療育日初日に見事に砕かれる

こととなります。これまでの保育現場での経験を思い出しながら運動遊具に誘い掛けてみるものの、その日に担当したA児は全く私の声に応答することなく、それどころか私の存在にすら興味を示すことはありませんでした。結局その日の私は、A児の後を追いかけるだけで、何も出来ずにA児との出会いの日が終わってしまうことになりました。療育後に何もできなかった自分に対する悔し涙を流したことは、一生忘れません。この日を境に、私は子ども達の育ちを支えるには一人ひとりの興味関心や、子ども達の願いを出発点とし、保育者が伴走していくことが何より大切であると考えようになりました。その後、7年間の療育現場での経験を経て、令和6年、再び保育現場に戻ることにになり、療育現場での学びを胸に『誰もが違うことを前提とした保育』を日々大切にしています。

現在の私は、主査主任(クラス担任をしながら担任と管理職を繋ぐ立場)という立場であり、同時に園内研究主任でもあります。どのように園内研究組織をマネジメントしていくか、日々悩みは尽きません。そんな中、4月のカンファレンスでは、一度立ち止まり自分自身を振り返る時間をもつこと、他者の意見を知ること、自分とは違う思いに触れること、さらにそれを協働的に省察し、対話を繰り返すことで、これまで自分の中にはなかった思いや考えの大切さに気づきました。このことから、充実した園内研究組織、豊かな職場集団構築のためには、自分自身も様々な先生方と対話を繰り返し、自らを省察・探究しながら、焦らず一歩ずつ学びを深めていくことが大切であると改めて思いました。教職大学院での学びを深め、それを園に持ち帰り、どのように広げていくかということも探究していきたいと思っております。大学院の先生方、院生の皆さま、2年間どうぞよろしくお願いいたします。

ミドルリーダー養成コース1年/宮古島市立伊良部島小学校

安里 あきの (あさと あきの)

ミドルリーダーコースに入学いたしました、安里あきのです。現場で経験を積む中で、自身の教育活動だけでなく、学年や学校全体を見据えたマネジメントや、同僚との協調的な学びの場づくりに課題を感じ、入学を決意いたしました。この2年間で、福井大学連合教職大学院の強みである実践的な省察を深め、理論と実践を往還しながら、自校の課題解決に貢献できる力を養いたいと考えております。多忙な中での学びとなりますが、志を同じくする皆様と切磋琢磨できることを楽しみにしております。どうぞよろしくお願いたします。

私はこれまで約20年間、沖縄県宮古島の教育現場において、児童一人ひとりの可能性を拓く教育実践に邁進してきました。特に直近の活動では、二つの大きな柱を中心に自身の専門性を磨いてきました。

第一に、地域素材を活かした探究活動の構築です。宮古島市教育研究所の第26期研究員として、「ふるさとを想い、豊かに生きる児童の育成」をテーマに掲げ、地域のよさや課題を自分事として捉え、当事者意識の醸成に注力しました。他者との協働を通じた解決プロセスの中で、児童が自らの成長をリフレクションを通して自覚することを重視し、将来の自立に向けた「未来を拓く力」の育成を目指してきました。

第二に、校内研究主任および学力向上推進主任としての組織的な授業改善です。令和5・6年度には、国語科の「話すこと・聞くこと」に焦点を当て、「自発的に問いを見つけ、協働的に解決に向かう表現力の育成」を研究テーマに設定しました。出前講座などを活用して理論と実践を往還させながら、児童が仲間との交流を通して考えを深める授業づくりを推進してきました。これらの経験を通じ、個の学びを組織の学びに繋げることの重要性和難しさを実感し、ミドルリーダーとしての自覚を深めてまいりました。

長年の経験を積む一方で、現在の自分にはミドルリーダーとして超えるべき明確な壁があることを認識しています。一つ目は、「発信力」と「対話術」の未熟さです。研究主任として学校のビジョンを掲げ、多様な教職員を牽引していく際、自分の言葉がどれほど同僚の心に届き、共感を得られているかという

点に課題を感じています。特に、経験年数や価値観が異なる教職員集団の中で意見を調整し、一つの方向性を見出していくためには、単なる指示ではなく、相手を主体的に動かすコーチングやファシリテーションの理論を体系的に学ぶ必要があると考えています。二つ目は、地域性を活かした「総合的な学習の時間」の更なる高度化です。総合主任として取り組んできた地域探究を、単なる体験活動に留めず、児童の「生きる力」へとより強固に結びつけるためには、プレゼンテーション理論や論理的思考の指導を、自分自身がまず高いレベルで習得し、手本となる必要があります。

福井大学での2年間では、これらの課題を克服し、「組織の力を最大化できるミドルリーダー」への脱皮を図ります。一つ目に、理論の習得と実践への還元として、コーチング、ファシリテーション、プレゼンテーションの諸理論を深く学びます。これを単なるスキルとしてではなく、学校経営や校内研修の文脈に落とし込み、教職員同士の「対話」を活性化させるための具体的な手立てとして研究します。二つ目にビジョンの言語化へ向けて、学校の教育目標や自身の教育観を、借り物ではない「自分自身の言葉」で語れるよう、多様な背景を持つ院生仲間との対話を通じて、多角的な視点を取り入れながら、説得力と共感性の高い発信力を磨きます。3つ目は、協働的な環境づくりへ向けて、児童が安心して学び、教職員が自信を持って教壇に立てるよう、「協働」によって創り出すプロセスを、福井大学の「実践と省察」のサイクルの中で構造化します。

大学院修了後は、得られた理論と実践知を携え、自校の核となるミドルリーダーとして、児童一人ひとりが基礎を固め、自信を持って学校生活を送れる環境を、教職員集団の対話によって創り出していきます。自身の発信力を磨くことは、私個人の成長のためだけではありません。それが教職員一人ひとりの意欲を引き出し、結果として子どもたちの豊かな学びに還元されると信じています。現場の複雑な課題を、個人の奮闘ではなく「組織の力」で解決できる教員として、宮古島、そして沖縄県の教育に貢献し続ける所存です。

ミドルリーダー養成コース1年/飛鳥未来高等学校 名古屋キャンパス

五十嵐 智哉 (いがらし ともや)

はじめまして。今年度よりミドルリーダー養成コースに入学いたしました、五十嵐智哉と申します。現在は、飛鳥未来高等学校名古屋キャンパスにて保健体育の教員として勤務しております。

私の教育分野でのキャリアは、大学卒業後の2020年に学校法人三幸学園へ総合職として入社したことから始まりました。当初の2年間は保育の専門学校にて学校運営の一端を担い、その後の2年間は法人本部の人材開発部にて新卒採用担当として、教育現場を支える「人」の側面から業務に従事してまいりました。こうした経験を経て、現在は通信制高校の現場にて、直接生徒と向き合う日々を送っております。

これまでの多様な業務を通じて、私は専門学生から就職活動を控えた大学生まで、実に1,000名を超える学生たちのキャリア選択の瞬間に立ち会ってきました。その中で確信するようになったのは、教育の真の目的は、単なる卒業や進路決定そのものにあるのではなく、その後の長い人生において、予期せぬ困難に直面した際にも自らの力で未来を切り拓いていく「生きる力」を育むことにあるという点です。そのため、現場での生徒との関わりにおいても、安易に答えを提示するのではなく、生徒の内面にある意欲を引き出し、自律的な行動へと繋げる「内発的動機付け」を常に教育の軸に据えています。

現在私が勤務している私立通信制高校は、生徒一人ひとりのニーズが極めて多様であり、教員には学習指導のみならず、広報活動や教務運営、進路指導に至るまでを総合的にマネジメントする役割が求められます。今年度、私は教務・広報の両面において学年全体の運営や組織的な企画に携わる立場をいただいております。こうした多岐にわたる業務に当たる中で、個々の教員の熱意を組織全体の成果へと結びつけるためのマネジメントの重要性を痛感するようになりました。

私が勤務する学校は、多様なバックグラウンドを持つ教職員が集い、常に新しい教育の形を模索し続ける活力ある環境です。一人ひとりが「生徒のために」という情熱を持って向き合う中で、その個々の熱意

を組織全体の知見としていかに結びつけ、持続可能な形へと昇華させていくかが、現在の重要なテーマとなっています。私はその中で、現場の声を大切にしながら、誰もがその専門性を存分に発揮できるような柔軟かつ強固な組織基盤の構築に貢献したいと考えております。

このような現場での実践的な問いを学術的に深め、解決の手立てを模索したいと考え、本教職大学院への進学を決意いたしました。私の探究テーマは、「ミドルリーダーとして、現場の多様な声をいかにして組織全体の改善や仕組み作りに反映させていくか」という点にあります。個々の教員の創意工夫を孤立させることなく、いかにして組織の文化として昇華させ、持続可能な学校運営を実現するか。教員としての「現場感覚」と、組織を俯瞰する「経営的視点」を融合させたマネジメント手法を確立したいと考えております。

最後に、私の私生活についても少し触れさせていただきます。私は東京出身ですが、幼少期から家族旅行で訪れていた沖縄の文化に深く魅了されて育ちました。その影響から、学生時代には沖縄の伝統芸能である「エイサー」に打ち込みました。また、幼少期から趣味であったスキーも大学からは部活に所属して取り組み、四季を通じてアクティブな生活を過ごしてきました。社会人となった今でもそのアクティブさは変わらず、夏には時折OBとしてエイサーの演舞に参加したり、年末年始には毎年新潟へスキーに出かけたりしてリフレッシュすることが、私にとって大切な活力源となっています。また、休日にサウナやラーメン巡りを楽しみ、心身を整える時間も欠かせません。

この福井大学連合教職大学院という素晴らしい学びのコミュニティにおいて、異なる環境で実践を重ねてこられた諸先輩方や院生の皆様と対話を深められることを、心より楽しみにしております。教育という正解のない問いに対し、皆様と共に考え、学び続けられるこの2年間に感謝し、精一杯精進してまいります。どうぞよろしくお願いたします。

ミドルリーダー養成コース 1年/岡谷市立岡谷南部中学校

宮澤 清悟 (みやざわ しょうご)

今年度から連合教職大学院ミドルリーダー養成コースに入学した宮澤清悟です。教職に就いてから早いもので9年目を迎えました。現在は長野県岡谷市立岡谷南部中学校に勤めて3年目の春を迎えました。専門は数学ですが、今年度は7年ぶりに技術科の授業も担当することになりました。学習指導要領の改訂や教材の進化は目覚ましく、日々新しい発見と教材研究の波に揉まれながら、新鮮な気持ちで教壇に立っています。

私の原点には、小学4年生の頃から続けている陸上競技があります。今でも長野県内のマラソン大会にエントリーし、風を切って走る高揚感を肌で感じています。地元の諏訪地域には一周16キロメートルの諏訪湖があり、休日にはその湖畔を走るのが習慣です。今年度からは陸上部の顧問を務めることになり、生徒たちと共に汗を流しています。陸上競技の醍醐味は、単に速さを競うことだけではありません。自己ベストを更新するために積み重ねる努力の尊さや、自分自身の限界に挑むプロセスの面白さを、生徒たちと並走しながら伝えていきたいと考えています。

昨年度は、本校の研究主任という大役を任せいただきました。そこで私が掲げたテーマは「語り合う楽しさを味わい、生徒と教師がわくわくする授業づくり」です。学校という場所が、単なる知識の伝達場所ではなく、言葉を交わすことで心がわくわくし、明日が待ち遠しくなるような空間であってほしいという願いを込めました。数学や技術といった教科においても、私は「言語活動」を軸にした実践を続けています。教科書の説明を黙って聞いているだけでは、知識はなかなか自分のものにはなりません。自分の考えを自分の言葉で誰かに伝え、あるいは他者の多様な視点とぶつかり合う。そうした試行錯誤のプロセスを経て初めて、学びは定着し、確かな知恵へと変わっていきます。

この「対話力」や「協働性」の育成は、子どもたちが将来、正解のない社会を生きていく上で欠かせない力です。大人になれば、異なる意見を持つ人々と折り合いをつけ、合意を形成していかなければならない場面が必ず訪れます。中学校という多感な時期に、多角的な視点から物事を捉え、論理的に思考し、それを他者と共有する経験を積むことは、生涯にわたる学びの基礎を養うこととつながると感じています。

この価値を教師と生徒が共有するために、年度当初には「学習オリエンテーション」を行い、目指すべき学びの姿を学校全体で確認しました。目指す方向を一つにすることで、生徒と教師の温度差をなくし、全員が前向きに学習に向き合える環境を整えました。また、学期末には「学びを振り返る会」を実施しています。これは単なる反省会ではなく、生徒が自分の学びを客観的に見つめ、自らの成長にオーナーシップを持つための大切な時間です。「こんなことを頑張れた」「次はこうしてみたい」と生徒同士が語り合う姿からは、学年ごとの成長の跡や、彼らが抱いている願いが現れます。教師にとっても、生徒の声は次なる指導への最高のヒントであり、生徒と教師の意識が重なり合う貴重な瞬間となっています。

そんな現場での実践を積み重ねる中で、私は「教科学習における探究的な学びの実現」という一つの大きな目標を掲げました。総合的な学習の時間に限らず、教科の中でも、問いを見出し、情報を集め、分析し、表現するという探究のサイクルを回したい。公式を暗記して計算問題を繰り返すだけの時間ではなく、社会との繋がりを感じられる「生きた問い」を中心に据えた授業をつくりたい。そのためには、ICTツールを単なる効率化の道具ではなく、一人ひとりの思考を広げる「考えるための足場」として活用し、個別最適な学びを支えていく必要があります。これから目指したいのは、教師が知識を授ける「伝達者」から、生徒の学びに伴走する「ファシリテーター」へと転換することです。生徒が自発的に見つけた「問い」を面白がり、彼らの知的な探究心に火をつける。ときには脱線や失敗さえも学びの糧として許容できるような、懐の深い授業をデザインできるようになりたいと考えています。そして、私自身のクラスや授業の枠を超え、こうした実践の喜びを同僚たちと共有し、学校全体を「学び続ける組織」へと進化させていくための体制づくりにも挑戦したいと思います。

今年度より福井の地で改めて「学生」として教育を学び直す機会をいただいたことに、心から感謝しています。この2年間は、私の教員人生においてかけがえない財産になるはずです。数学的な見方・考え方をベースにしながら、温かな教育のあり方を、多くの仲間たちと共に探究していきたいと思っています。充実した学びの時間を過ごせるよう、全力で駆け抜け

ていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願
いいたします。

ミドルリーダー養成コース1年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

大野木 亘 (おおのぎ わたる)

初めまして。今年度より福井大学連合教職 大学院
ミドルリーダー養成コースに入学しました、大野木
亘と申します。専門科目は英語です。教師として採用
されて16年目を迎えました。初任の公立中学校で
5年間、2校目の公立小学校で7年間勤め、現任校は
4年目になります。どの勤務校でも、様々な同僚や子
供たちと出会い、その度に自分の「授業観」や「子供
観」、「教材観」が変容していることに驚かされると
ともに、充実感も覚えています。現任校では中学年の
担任を務めることが多く、子供たちの元気な様子を
横目に日々を過ごしています。

私は教師として「考える」という行為と「他者意識」
を大切にしています。そして、それを習慣づけてくれ
たのは「将棋」です。みなさんは「将棋」に触れたこ
とがありますか？最近になって、あるプロ棋士の影
響で、「観る将」、「タイトル戦の食事やおやつ」な
ど様々なメディア等で取り上げられるようになりま
したが、私が将棋と出会い、一生懸命取り組んでいた
ころはほとんど注目されることはなかったと記憶し
ています。私が感じる将棋の魅力の中に「指す人によ
って特徴が出ること」、「考え続けることができる」
があります。同じ戦法で対局を進めていても、中盤以
降になると、人によって指し手が大きく変わること
があり、「そういう風に指すのか…」と対局中に新鮮
さを感じることがあります。また、考えてを重ねて
「より良い一手」を追い求めることにも面白さを感じ
ています。

そして将棋には他者の存在は不可欠です。対局は
相手がいるからこそ成り立ちます。そして棋力を向
上するためには対局相手はもちろん、切磋琢磨する
仲間がとても大切です。特に大学生時代は、同じ部活
の仲間と団体戦での全国大会出場を目指し、互いに
高め合いました。4年間で全国大会出場を実現した
のは1度だけでしたが、仲間と目標達成に向けて諦
めずに努力をし続けたことは私にとってとても貴重
な経験でした。

将棋で培ったことが、学校での子供たちとの関わ
り合いや、対話を通じた同僚との時間や大学院での
学びに貢献していると感じています。子供たちや同
僚たちが何を考えているのか、彼らにとってより良
いこととは何かを考え続けることが少しでも彼らの
支えになればと思いながら日々を過ごしています。
これからも、「考えること」と「他者意識」を大切に
しながら実践を重ねていきたいと考えています。そ
れらの行為を通して、「自分と子供」、「子供と子供」、
「子供と材」、「子供と教師」、「自分と教師」につ
ながってほしいと考えているからです。先日の合同
カンファレンスでも他の先生方と思いがつながつた
と感じる場面がいくつかありました。誰かの思いに
対して、その場で考えて答える。その考えに対して別
の方が自分の考えを伝える。それが何度も重なるこ
とで、自分が今年度大切にしたいことが改めてはっ
きりしたように思います。その時は、「子供」を主語
に多くの事を考えました。

○この「主題」や「問い」に対して子供がどんなこと
をつぶやくだろうか、それに対してどのように答える
だろうか。

○子供たちから自然と「問い」や「思い」が生まれて
くるような「場の設定」、「環境の整備」はどのよう
な物があるのだろうか

○「子供がやりたいこと」「好きなこと」だけをやれ
ばよいわけではない。そこから何を深め、「学び」や
「得るもの」まで到達できるのだろうか

○子供が何かを得るためには、子供の探究心を満た
すためにはリスクを含んだ「挑戦」が必要である

○子供の五感を意識し、五感が育つ取り組みを意識
する

考えてみれば当然のことではありますが、日々の
忙しさを理由にその視点を疎かにしていたように思
います。心に余裕をもちつつ、自分の研究の軸を大切
にこれからの実践に向かっていきます。

ミドルリーダー養成コース1年/埼玉県立豊岡高等学校 武村 紗織 (たけむら さおり)

皆さんはじめまして。今年度より入学いたしました、武村紗織と申します。

出身は東京都の下町育ちですが、大学卒業と同時に埼玉県立の高等学校の福祉科教員として勤務してきました。今年度からは、埼玉県西部地区の豊岡高校（普通科）の1年目の教頭として勤務しております。

普通科高校を卒業後、将来の夢も特にありませんでしたが、突然訪れた平成の大不況（バブル崩壊）とじわじわ訪れた高齢社会をこれからの社会の課題として感じ、これからの時代は福祉ビジネスだ！と信じて迷いませんでした。そこにいつも頭に隅にあった「先生」という職業も加わり、大学では「一応教職課程を取っておくか」くらいのモチベーションで教職へのスタートを切りました。どちらかというと、福祉科教員になるというよりは社会福祉士として働く方が現実的な将来像でした。

しかし、学生時代の塾講師や家庭教師のアルバイト経験を経て、子どもに勉強を教えることの楽しさややりがいを感じるようになり、大学時代の就職活動では福祉科教員として働ける県の教員採用試験に挑戦しました。大学卒業後は福祉科のある埼玉県立高校での実習助手や臨時的任用教諭を経て、平成20年に正規採用となりました。高校福祉科の教科は全国的にも珍しく、いつも教科の説明をするところから始まります。福祉はとても幅広い分野ですが、高校福祉は高齢者の介護が中心です。

高校卒業後、介護の知識や技術、資格を得て、即戦力として高齢者施設で勤務する専門的な人材の育成を行います。専門科につき、主要5教科の授業時数も少なく、高校3年生にもなると福祉科目ばかりになります。最も専門的に福祉を学ぶ高校は「介護福祉士国家資格」の養成課程が高校の教育課程となり、普通科の高校とはかなり別なカリキュラムで授業を行います。

そのような珍しい教育を行う学校で1校目5年間勤めました。赴任したての頃、中学3年生の進路選択

の時期に将来の職業を選択するということに疑問を持ちました。高校は普通科に行き、大学に行って将来の選択肢が存分にある中で自分の職業を決めるものだと決めつけていました。初任者の頃、この質問を当時の福祉科主任に投げつけたところ、高校卒業した後、皆大学に行けるわけじゃない。働かなきゃならない子たちなんだと言われ、衝撃を受けたのを忘れません。

その後、2校目は総合学科で福祉科目を置く昼夜開講定時制高校に13年間勤めました。2校目は専門高校ではなかったため、福祉科目は教養程度の設置でしたが、この学校でも福祉の専門職を育てることができるのではないかと、介護職員初任者研修（以前のホームヘルパー2級）の資格を取れるカリキュラムを構築しました。構想に5年、ようやく実施年度となった1期生は新型コロナウイルスによる大混乱と時期が重なり軌道に乗るまで4～5年はかかりました。しかし、構想を練る中で当時の校長先生をはじめとする管理職の先生方は、福祉を学校の目玉にすることを全力で応援してくれ、教員の人事や特別な予算の面でも大きく協力してくださいました。自分の想いや努力を周りの方々に支えていただいた経験から、今度は自分自身が福祉科の先生方を支えたいと思うようになりました。2校目では、福祉科や分掌の主任として学校運営に携わり、後任の育成や自分自身のキャリアアップを考える時期にもなり、管理職試験を受けることにしました。

将来管理職として学校や教職員を支える自分自身が想像できるようになった頃から、今の自分にもっと「感じる力」、「創造する力」が必要だと感じています。変化する社会の中で、学校は取り残されていると感じる場面もあります。私は2年間の教職大学院の学びと仲間との出会いを通じて将来の大人、すなわち目の前の子どもたちがよりよい人生を送れるように貢献したいと思っています。2年間どうぞよろしく申し上げます。

ミドルリーダー養成コース1年/板橋区立志村第四中学校 日下部 渉 (くさかべ わたる)

はじめまして。今年度から福井大学教職大学院に入学しました、日下部と申します。埼玉県在住ですが、東京都の教員となって15年目、現任校では教務主任として着任し3年目となります。

私は高校時代、数学の面白さに惹かれ、大学でも数学を研究したいと理学部数学科に入学しました。そこで学ぶ中で、高等学校で数学を教えたいと思うようになり、私立高校で7年間ほど数学科教員を務めたのちに、東京都の教員として採用になりました。最初は高等学校を希望したのですが、中学校所属になり、そこから中学校の教員として現在4校目の勤務をしています。数学の面白さを「伝える」ということにこだわりをもってやっていたのですが、次第に「アクティブ・ラーニング」「学び合い」という言葉を聞くようになり、自分が学生の頃とは考え方を変えなければならないのだと大きく感じるようになりました。今では、「いかに授業で教えずに、生徒自身の学びを促していくか」「生徒が主体的に学び、考えるようにするか」ということを大事に、様々な方法に挑戦しながら日々教科指導を行っています。

現任校の教職員はみな協力的で、様々な求めに応じて意欲的に職務を進めています。本校では板橋区が主導する小中一貫型の新しい学校づくりを目指し、校舎の改築が始まっています。令和10年度に控える新校舎開校とともに、教科センター方式の学校へ生まれ変わる予定です。教科センター方式とは、各教科で専用の教室を設け、生徒が授業ごとにその教室へ移動して学ぶ学校運営・校舎設計の方式です。ICT機器を備えた専門教室での協働的な学習を推し進めるとともに、生徒が自ら学びにいくという姿勢を育み、主体性を高めることが期待されています。

そのような中、板橋区教育委員会が推進する教科センター方式を採用した学校の取組として、協働研究の運営・推進に取り組む派遣教員を本校から1名選出することとなりました。そこで、管理職から声をかけていただき、私がそれを担うこととなりました。私は今後、福井大学教職大学院の院生として学びを深め、その成果を自校の学校づくりに還元していくことが求められています。

そういったわけで、私は自分で受験を決め、学ぼうと入られた他の院生の方々と、入学の経緯が異なります。ここまでは正直、受け身の気持ちでいたと思います。そんな私が最初に参加したのが4月の月間カンファレンス。この東京サテライトでの2日間の実践を経験して、私の意識は大きく変わりました。

異なる地域・校種・職層の方々と語り合う中で、周りの方の学ぶ意欲、学びへの明確な目的意識に大きな刺激を受けたこと。そして、以前に同じように板橋区からの派遣教員として学びつつ、校内研修に取り組まれた修了生の方の実践記録を読むことができ、今後の学びのイメージができたこと。教員を続けながら自分自身も学んでいくということへの、希望や意欲が湧いてきました。

とはいえ、校内研修を通して教員全体の意識を高め、学校全体で授業改善に取り組んでいくことは、簡単ではないと思います。本校では教科センター方式への理解、研修への前向き感もまだまだです。そこで自分が何をしていけるか。考えながら一歩ずつ、これから挑戦していきます。この機会をいただけたことに感謝しながら頑張ります。福井大学の先生方、スタッフの皆様、2年間よろしく願いいたします。

ミドルリーダー養成コース1年（1年履修）/福井県特別支援教育センター

吉田 千晶 (よしだ ちあき)

はじめまして。福井大学連合教職大学院に入学した吉田千晶です。令和7年度より福井県特別支援教育センターにて教育相談および就学相談業務を行っています。私は令和6年度まで、小中学校で特別支援学級担任として勤めていました。現場を離れ、教育相談という視点から子どもたちや先生方と相談しな

がら学級や学校を支える立場となりました。そこで改めて「特別支援教育とは何か」「学校という組織において何が求められているのか」を改めて考えたいと思っています。

私の特別支援教育に対する向き合い方の根底には、初めて特別支援学級を担任した際の経験があります。

当時は、個々の特性に合わせた指導の難しさに直面し、日々手探りの状態でした。当時の私は「その子のため」という誤った熱意のもとに行動し、その子の困りの背景を考えた指導ができていませんでした。その子が交流学級でトラブルを起こす度に厳しい指導を繰り返しました。しかし一向に改善しませんでした。「これで本当に子どもの成長を支えられているのだろうか」と自問自答していた私を支えてくださったのが、当時特別支援教育コーディネーター（以下、特コ）研修で伴走して下さっていた特別支援教育センターの先生でした。その先生からいただいた言葉や、特別支援教育コーディネーターとしての業務内容、そして何より「子どもをどう見るか」という専門家としての心構えは、未熟だった私の指針となりました。センターの先生との対話を通じて、私は「担任一人が抱え込むのではなく、チームで支えること」の重要性を痛感しました。これを機に、私は自己研鑽をますます大切にしたいと考えるようになりました。特別支援教育センターが主催する研修講座へ積極的に足を運び、理論的な背景を学ぶとともに、書籍を通じて最新の知見を学ぶ日々が始まりました。そして学んだ理論を、目の前の子ども一人ひとりの実態にどのように合わせていくか、日々の授業や生活指導の中で試行錯誤していく中で、徐々に特別支援教育の専門性を高めていくことにつながったと思います。それと同時に特別支援教育の奥深さを知り、常に学び続ける必要性を感じています。学級担任として子どもたちの成長を間近で感じられる特別支援学級の面白さは私にとってかけがえのない経験となっています。しかし、それと同等に魅力的に感じたのは通常学級の先生方との連携でした。特別支援教育において欠かしてはいけない視点は、特別支援教育を通級による指導や特別支援学級という学びの場だけに完結するべきではないということです。通常学級にいる「少し気になる、支援が必要なお子さん」に対し、通常学級の中でどのような環境調整や配慮があれば、その子がその子らしく学べるのかを通常学級の担任の先生と共に検討し、具体的な方法を見出していくことに、私は大きなやりがいを感じるようになりました。日々多忙な担任の先生が指導に悩む中で、特別支援教育の視点から話し合い支援を検討する中で、「それならできそう」と担任の先生の前向きな言葉

が生まれ、結果として子どもの落ち着きや学びに変化が現れたときや、保護者の方がその子の困りを理解し、支援を前向きに考え始めてくださったとき、大きなやりがいを感じるようになりました。「個」への支援が、結果としてクラス全体の「集団」の質を高めていくことを、様々な学校現場でより多くの担任の先生や特コの先生が感じてくださり、他のケースでも教室でできることがないか考えていけるようになることは、私が特別支援教育において大切にしたい価値観になっています。

令和7年度から、私はかつて自身を支えてくれた場所でもある「福井県特別支援教育センター」へと異動しました。教育相談や就学相談の現場では、保護者の方々の悩みや、現場の先生方が抱える困難さにセンター所員として一緒に考えていくこととなります。現場の苦勞がわかるからこそ、教育相談においては理想論ではなく、いかにして「現場で機能する支援」を提案できるかを考えています。私自身がその学校に行けるのは3か月に1回程度しかありませんし、子どもたちに実際に関わるのは現場の先生方だからです。相談に来られる事例は多岐にわたり、これまでの経験だけでは解決できない課題も少なくありません。改めて、自分自身がさらに学んでいく姿勢と学校組織全体として特別支援教育をどのように機能させるかを特コや担任、管理職の先生と考えていくことを大切にしたいと考えています。

大学院では、特に「特別支援教育の理念をいかにして校内の実践に落とし込んでいくか」というテーマで取り組みたいと考えています。大学院には、様々な校種、異なる経験をもつ先生方が集まっています。現場の最前線で実践する先生や私と同じように行政機関に身を置く先生もいらっしゃいます。こうした多様なバックグラウンドをもつ先生方との対話を通して、一教員の「個人の努力」に頼るのではない、持続可能な校内支援体制のあり方を考え、「特別支援教育」が、特別な誰かのためのものではなく、学校全体の教育の質を高めるための基盤とならばどうするとよいか考える機会にしたいと考えています。まだまだ未熟な点も多い私ですが、大学院の皆さんと共に切磋琢磨しながら学んでいければと思います。何卒よろしく願いいたします。

ミドルリーダー養成コース1年/宮古島市立北小学校 平良 ゆかり (たいら ゆかり)

はじめまして。ミドルリーダー養成コース1年の平良ゆかりと申します。小学校教諭として採用され、今年で13年目を迎えました。私の出身は「宮古ブルー」と称される美しい海が自慢の宮古島です。地元で育った私にとっても、その透き通った海の青さは、心を癒やしてくれる大切な宝物です。

近年、島は観光地として発展し、県外からの移住者や外国籍の方も増えました。沖縄には、多様な文化が混ざり合うことを肯定する「チャンプルー文化」という言葉がありますが、現在の宮古島もまさに、多様な価値観が混ざり合う新しいフェーズに入っていると感じています。学校現場においても、多様な背景を持つ子どもたちや保護者が増えたことで、これまでになく対応や要望も増えてきましたが、それは私たち教員にとっても、良い刺激や学びの機会となっています。

こうした変化の中、私は過去2回、夏休みに開催されている福井大学教職大学院の宮古島ラウンドテーブルに参加しました。全国の先生方との対話を通じ、悩みや価値観を共有できたことは「チャンプルー文化」そのもののような素晴らしい体験でした。当時は自分が院生になるなど想像もしていませんでしたが、今、こうして院生となって学ぶことに、不思議な縁とわくわくした気持ちを感じています。

私の教員としての原点は、採用前の1年間、教育支援センター(当時は適応指導教室)の支援員として不登校の子どもたちと過ごした経験にあります。葛藤しながらも懸命に頑張る子どもたちの姿や、我が子の幸せを願って苦悩する保護者の思いに触れ、「いつか不登校で悩む人たちの力になりたい」と考える

ようになりました。その後の12年間、学級担任として「明日も学校に行きたい」と思えるような学級経営の根底には、常にこの原点がありました。

今年度、念願叶って教育支援センター「まていだ教室」の指導教諭として勤務することになりました。教室の名にある「ていだ」とは、宮古島の方言で「太陽」を意味します。不登校に悩む子どもたちやご家族が、太陽の下で自分たちらしく、のびのびと輝けるような支援を行いたい。私自身はそんな思いを持っています。昨年「適応指導教室」から「教育支援センター」へと名称が変わりました。不登校支援も「居場所支援」から「社会的自立や学習保障」へと変わり、支援のあり方も複雑化しています。原籍校との連携の深め方や、一人ひとりに最適な支援の形を模索する日々です。名称が「センター」へと変わった今、その機能も最適化していく必要があると感じています。大学院での新たな知見を取り入れながら、宮古島の地域特性に即した、教育支援センターのあり方について考えを深めていきたいと考えています。

4月の合同カンファレンスでは、他の先生方の考えに触れ、自分とは違う視点に驚いたり共感したりしながら、楽しく語り合うことができました。帰島してからも、多くの対話が思い出され、考えのアップデートがまだ続いています。この2年間、全国から集まる多様な専門性を持つ皆さまと語り合い、自身の悩みや想いを共有することで、自己のアップデートがどこまでいけるのか楽しみにしています。教職員の皆さま、院生の皆さま、どうぞよろしく願いいたします。

ミドルリーダー養成コース1年/カリタス女子中学高等学校

岸川 侑磨 (きしかわ ゆうま)

初めまして。岸川侑磨です。出身は愛知県名古屋です。生まれてから就職までずっと県内で育ちました。教員にはなりたいなど中学生の頃からどこかで思っていました。高校は英語や総合学習が盛んなコースのある高校へ進学しました。そこで出会った担任(3年間持ち上がり)は行動力や考え方の柔軟性がすごく、それまで田舎の公立校で過ごしてきた私にはとても新鮮でした。当時まだ2010年前後で、LGBTについても教えてもらったし、子どもの貧困や女性

のエンパワメントにも言及して考える時間をとって来ていました。担任の教科は英語だったのでもちろん英語力も伸びました。そんな担任からたくさん刺激を受けたものの、人としてはあまり好きになれず、「こいつにもできるなら、自分もこれくらい教えられる」とか「こいつの大学時代よりももっとすごい大学生活送ってやる！」みたいな反抗心というかライバル心というか、とにかく良くも悪くもロールモデルであるのは間違いありません。なので大学は教

育学部でなく、人文社会学部の国際文化学科に進学しました。総合大学だったので、いわゆるリベラルアーツもたくさん学べました。もう一度大学生になれるなら心理言語学専攻にしたいと思います。在学中はアメリカペンシルバニア州に1年留学もしていました。TA(Teaching Assistant)で日本語ネイティブとしても働きました。こうした経験から、英語をツールとして生徒に授けて、「英語をきっかけに将来の可能性を広げてあげたい」、「やっていてよかったと思える英語力を授けたい(受験も日常生活でも)」。この2つをモットーに教員をやっています。

新卒から5年間私立の女子校でグローバルコースという英語や総合型学習に特化したコースをメインに担当してきました。私が高校や大学の時に特殊なコースにいたということもあり、私の経験やアイデアを取り入れてもらったり、授業も単独コースというメリットを活かし、自分のやりたいことをやらせてもらったりという環境で過ごしました。

しかし、現在の所属校はそうした英語特化のコースがなく、進学校であるので、前任校のように全員が英語モチベーションも高いということもありません。大学進学を目指している生徒が大多数で、受験科目としての「英語」を所望する生徒のニーズに応えつつ、授業内でなるべく視野を広げてあげられるきっかけと、コミュニケーションのツールとして英語を使う機会を増やしていけるよう授業計画は常に模索しています。昨年度の卒業生には、高校3年間の総まとめとして、「1分間でA4用紙1枚を私に売りつける」というお題を課し、値段設定から交渉術まで生徒自身に決めてもらいました。販売戦略としてそれらを考えさせ、それがうまく1分間で機能していたかはわかりました。原稿を考える際に、多くの生徒がチャッピーを使っていました。AIに英語の文を作らせる

以上にタイパ&コスパがいいことなんてないと思います。しかし、相手に納得をしてもらいながら会話をするのというのは、聴き取りやすさはもちろん、非言語コミュニケーション、話の展開、商品の付加価値づけなど様々なことを考えて話さなくてははいけません。AIとかポケトークでテクノロジー頼りにしている彼らには高校3年間の集大成としての「英語を話す」を本物に感じられた時間になったのではと思っています。もちろん、こちらが予想していなかった副産物としての課題もあったので要再検討&ブラッシュアップという感じですが。

現任校での勤務は4年目です。前任校はお寺がルーツの儒教に根ざした礼節を重んじる厳しい学校であったのに対して、現在はキリスト教で人を許して、分け隔てない愛を持って接するが基本理念です。ギャップがすごく、生徒指導という場面で未だに慣れてないのが正直なところですが。にもかかわらず、なんと驚くべきはそんな私が指導部の主任の任を拝命してしまったのです。就任7日目、実稼働日数2日にして早速大仕事をし、連日残業。生徒が穏やかに学校生活を送れるサポートをしていけるようにこの任を務めていくのが今年の目標です。

最後に、大学院ではまだはっきりとテーマを据えられていませんが、教員歴10年の節目の年になるので、授業の内省をしていくと言う点では反転学習について追究していけたらと思っています。授業が45分の3コマ(高2まで)と時間制約がかなりあり、進学校としての生徒保護者のニーズを満たしつつ、英語を通した将来のきっかけ作りをしたいという私の目標を両立していく必要があります。しっかりと生徒の様子や勉強効果などを振り返りながらそれを実践研究として行きたいと考えています。これから2年間よろしくお願いたします。

ミドルリーダー養成コース1年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

Fadi Abuawad

My name is Fadi Abu Awad. I have a Bachelor's degree in Physics with a minor in Electronics, and a Master's degree in Methods of Teaching Science. I am a science teacher from Palestine, and I have been teaching since 2009. In the first years of my career, I also taught mathematics and technology for grades 5 to 8. Later, I focused mainly on teaching science in different schools.

During my work, I always tried to improve my teaching methods and help students understand science in a practical and meaningful way.

In my teaching, I believe that students learn better when they are active. I usually use group work, simple experiments, and real-life examples. For example, I sometimes take students outside the classroom to apply

what they learn, such as calculating the mass of rocks or observing plant growth. I also try to use low-cost materials so that students can repeat the experiments at home. These experiences helped me see that students enjoy learning more when they connect science with their daily life.

Currently, I am a teacher at Ja'far Basic School. Also the Master's degree in Methods of Teaching Science helped me deepen my understanding of effective teaching strategies and educational research. I have more than 15 years of experience, and I have conducted several small research activities in my classroom. I also worked for about one year as a research assistant at Al-Quds University, where I was involved in a project about hydroponics and aquaponics. This experience helped me understand how scientific research can be applied in real situations.

Now, I am studying at the University of Fukui in Japan. My goal is to improve my teaching skills and learn new methods, especially in integrating science with mathematics and technology (STEM). I am interested in how Japanese schools develop students' thinking and problem-solving skills, and how teachers collaborate to improve lessons.

In the future, I would like to use what I learn here to support teachers in Palestine. I hope to design practical training programs that help teachers create meaningful and engaging science lessons. I believe that improving teachers' skills is the key to improving education.

Finally, I am looking forward to learning from my classmates and sharing experiences with them. I hope this program will help me grow as a teacher and contribute to better education in my country.



インターンシップ・週間カンファレンス報告

自分へ問うてみる

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期過程

佐々木 愛那

「問いの目をもつ」。これは、今年度の私のモットーである。私は「あなたはどうか」と聞かれることが怖い。これまで私は、わからないものでもとりあえず「それはそういうもの」として受け入れてきた。それは全く明るい意味での受け入れではなく、むしろ後ろ向きな意味合いが大きい。教職大学院へ入学して1年が経ち、金カンを含むカンファレンスやインターン先である附属で、先生方や多くの院生の方と実に多くの時間を語り合ってきたように思う。そこでよく耳にしていたのは、「いま（他者）の話を聞いて、あなたはどうか思う？質問はある？」という旨の問いかけである。そう問いかけられた時の私は、「えーっと…」で言葉が詰まるほど何も出てこない。周りの同期、先輩方、先生方はいろいろなところに問いの目をもっておられて、それを問い返すことでグッと語り合いが深まっているような気がした。それができないこと、そして何も考えてないわけではないのだが、いざ言葉にしようと思うと何も出てこないことが強くコンプレックスに感じるようになった。それは日

に日に強くなっていく一方で、「どう思う？」の言葉が、私に何か答えを求めているのではないか…、私の考えを吐露しないといけない…、だから言わないと…！！でも何も出てこない！語り合う時間は、多くの学びを得られる有意義な時間でもあったが、その一方でとても苦しいものだった。

この苦しみは、M2 を本格的に意識し始めた昨年度3月から、より一層強くなっていった。M2になると、金曜カンファレンス（以下、金カン）を自分たちで運営していく立場となる。M1～M3の学びとなるように企画・運営し、もちろんファシリテーターとして語り合いの場を深めていく立場でなくてはならない。私には、過去の先輩方や他の同期のように核心をつくようなツッコミも、語り合いが深まるようなツッコミも、人と人を繋げるようなことも、何もできないのに…。私にM2としての役割をまっとうすることができのだろうか。それは今でも不安に思っている。しかし、時間と言うものは私の後ろ向きな思いとは裏

腹に過ぎていき、もうすでに4回の金カンを終えている。私はM2として、ファシリテーターとして、金カンに参加する皆に深い学びの場を与えることはできているのかはわからない。しかし、そんなにウジウジしていても目の前の皆さんに申し訳ない。そう思い、まずはみんなの思いや悩みを耳を傾けることを心がけた。見取りやその記録に対して悩みを吐露するM1、「良い」授業とは何かについて互いに語り合う院生たち。その話を聴いていると、不思議と疑問が湧いてきた。「私たちはなんのために記録を残すのだろうか」「なんのために子どもを見取るのだろうか」『授業における「良さ」とはそもそもなんなのか』…、この疑問が皆の思いや考えを深めたり、悩みを解消できているのかは正直怪しいところである。しかし、このように疑問が湧き出てきたのは、今までの私が問われてきたことであり、その時はうまく表現できなかったものの、その後もインターンシップやさまざまなカンファレンスで何度も考えてきたからかも

しれない。それに対する答えは、今も出ていない。だからこそ、他者へ問うように自分にも問うていたのかもしれない。問われ、考えることは苦しく難しい。しかし、それが自分を見つめ直す機会となり、学びを深める鍵となることをこの1年で知った。それは何度も語り合うことができたこの環境のおかげだと、強く思う。

「問いの目をもつ」ことが「自分へ問い、立ち返って考える」ことになるのだと気付くことができたのは、自分の中で大きな進歩のように思う。他者へ問うことで、自分自身へも問い、考えるようになる。考えることは苦しい。すぐに答えを出すことは難しい。だから、考えるのだろう。だから、問うのだろう。苦しみを楽しむ…なんて言葉を聞くが、私にはまだそのレベルには到底及ばない。苦しいものは苦しい。だからこそ、今日も自分に問うていきたい。

インターンシップでの学び

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

齋藤 賢哉

私は現在、福井大学教育学部附属義務教育学校においてインターンシップを行っている。本インターンを通して、自身の教育観やこれまでの歩みを振り返るとともに、教師として必要な資質・能力について具体的に捉え直す機会を得た。

まず、自分のこれまでを言語化する過程において、一年前の自分がどのような思いで教職大学院に進学したのかを改めて整理することができた。当時の私は、教員としてのスキルの未熟さに不安を抱き、その克服を目指して進学を決意した。しかし、インターンシップを経験する中で、教員に求められる「スキル」は一樣ではなく、学級経営における統率力やコミュニケーション能力、専門性に裏打ちされた授業力、さらには学校運営に関わる企画力・調整力など、多面的な要素から成り立っていることに気づいた。そして、これらの力は単に知識として身につくものではなく、実際の教育現場に関わり、他者との対話を重ねる中で具体性を帯びていくものであると実感した。

その中でも特に大きな学びとなったのが、「教材研究」の捉え直しである。これまで私は、教材研究とは

授業内容を理解し、それをいかに分かりやすく伝えるかを考えることだと認識していた。しかし、実際に授業づくりに関わる中で、教材研究とは「この教材からどのような問いが生まれるのか」を探究する営みであると考えようになった。生徒の思考を引き出す問いを設定することによって、授業は一方向的な知識伝達の間から、生徒が主体的に考え、対話しながら学びを深めていく場へと変化する。この問いの質こそが授業の質を大きく左右することを、実践を通して強く実感した。

一方で、生徒との関わりにおいては多くの課題も感じている。インターン生という立場上、生徒との距離感や信頼関係の築き方に悩む場面が少なくない。授業中の発言への応答や、日常的な声かけ一つをとっても、その在り方によって生徒の反応や関係性が大きく変わることを実感している。教師として生徒と向き合うことは決して容易ではなく、その奥深さと責任の重さを痛感している。

さらに、単元を通じた授業実践に携わる中で、「単元をデザインすること」の難しさにも直面した。これ

までの私は、一時間ごとの授業の構成に意識が向きがちであったが、実際には単元全体を見通しながら、生徒にどのような学びの経験を積ませるのかを構想することが求められる。各時間の学びがどのようにつながり、最終的にどのような理解や資質・能力の形成に結びつくのかを考える必要があり、その構想力の重要性を強く認識した。

また、インターンシップを通して、探究や協働といった言葉についても改めて考えさせられた。一年間の経験の中で、それらの明確な答えを見出すことはできなかったが、むしろ実践を重ねるほどにその意味の奥行きや難しさを感じるようになった。しかし、この「分からなさ」が学び続ける原動力であり、自分自身の教育観を深めていく契機になると捉えている。

印象に残っている言葉として、「授業で何を大切にするのか」という問いがある。これまで、メンターの

教員や先輩方の授業に触れる中で、その豊富な知識や工夫に憧れを抱いてきた。しかし同時に、それらをそのまま模倣しようとしてもうまくいかず、悩むことも多かった。そのような中で、「自分にしかできない授業がある」という助言を受け、自分自身の教師観を見つめ直す必要性を強く感じた。授業において何を大切にすることは教師によって異なり、そこにこそその人らしさが表れる。だからこそ、自分なりの軸を持つことが重要であると考えようになった。

今後は、生徒の実態を踏まえた問いの設定をさらに追究するとともに、単元全体を見通した授業設計の力を高めていきたい。また、生徒との関係構築にも主体的に取り組み、実践を通して自らの教育観を絶えず問い直していく姿勢を大切にしたい。そして、自分にしかできない授業とは何かを模索し続けながら、教師としての専門性を着実に高めていきたい。

教職大学院での学び

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学附属義務教育学校後期課程

村上 誠

教職大学院に入学して早いものでもう2年目になってしまった。インターン先は昨年と変わらず、福井大学附属義務教育学校の方にお世話になっている。昨年は8年生のクラスに入り、そのまま持ち上がりで9年生のクラスに入らせてもらった。インターン生の同期にはすでに9年生を担当していた人もおり、話を聞くと、9年生には「演劇」という約半年をかけて、子供が作り上げる大作があり、それを通していく中で、子供の成長を間近で見ることができるという。そんなものをこれから見るができるというのは非常に幸せなことである。また今年度からは、同学校にて非常勤講師としても働かせてもらうことになった。インターンの担当クラスとは違うが、どんな環境であっても頑張っていきたい。

教育実習や、インターン先での授業実践は行ってきたので、授業を行うことについては、少し慣れてきた。しかし、非常勤として、一クラス担当することになると、話は変わってくる。附属義務教育学校では探究的な授業を大切にしている。今までの自分自身が受けてきた授業を思い返してみても探究的な授業はそこまでなかったと思う。つまり、自分自身経験がない授業について子どもと共に創り上げてい

く必要がある。新学期が始まって、何度か授業をしたが、やはり探究的な授業。今の私は、子どもが主体的となって、自ら問いを持ち、課題解決に向かうことができる授業だと考えているがどうもしっくりきていない。そもそも今の授業スタイルで、子どもは本当に知識を獲得することができているのかなど、不安な要素がたくさんある。今年一年間は子どもとともに自分自身も授業とは、探究とは何なのかについて、向き合う一年間にしていきたい。

また、今年度から、金曜カンファレンスという、主にM2の院生がカリキュラムを作り、一年間かけてM1、M2、先生と協力し合いながら、教育について、学んでいく場があるのだが、その運営をする側になった。

昨年度にもM1だけの時間があり、今年一年のカリキュラムづくりをするための練習をおこなってきた。大まかな流れについては知ることができたため後はどのようにデザインするかである。このデザイン等がまた難しく、授業を作る時と一緒で大まかな流れは決まるのだが絶対にその流れと同じように進むことはない。子供の思考のプロセスを読み取るかのように院生の思考を考えてもやはり同じように進むこ

とはない。その都度少しずつ変更していく必要があるのだが院生の間でも意見が割れることがある。授業を考える時と同じように自分はこうしたいという意見があったとしても同じ教員を志望している人の集まりとしてこだわりはある。そんな中で今年一年間どのように院生が、カリキュラムが変化していくのか楽しみである。

この金曜カンファレンスというものを単なるカリキュラム開発の一貫的な立ち位置で考えていたが、授業のような感じにも見ることができ、単なる教科としてではなく、教育について捉え直していく。一年間と短い中ではあるが、協力しながら教育について考えたい。

M2 になり変化した部分はあったのか

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学附属義務教育学校後期課程

三輪 佑輔

2年生になり、4月が終えた。今年は昨年を振り返り、様々な行動や考えが今に繋がっているかもしれないと感じた。特に他者とのコミュニケーションや協働に関してはまだ慣れない部分もあるが、少しは向上したのではないかと感じる。また新しく挑戦をしている年でもある。自分の体に無理せず、学びを深めるためにもインターンだけでなく、大学院での学びも大切にしたいと考えている。

今年のインターンは去年授業実践をしたクラスの子どももいる。インターン自体はまだ慣れない部分もあるが、クラスの子ども達がこれからどう成長していくのか見守っていけるのがとても楽しみに思う。特に去年は、自分の気持ちや行動も反省すべき点ばかりであった。クラスの子どもが変わると、クラスの雰囲気がガラッと変わる。当然であるが、去年のクラスとも全然違うが、これをしっかり感じられたことが個人的にはとても嬉しく思う。また、社創での活動は子ども達を大きく成長させてくれることを去年とても実感した。現在の様子では、頑張る姿勢の子が多くいるが、まだ周りとの波長や意見がぶつかることが良く見える。

また、今年はインターンのクラスで道徳の授業実践をさせていただき旨の話をいただいている。私自

身、大学生時代でも道徳の授業実践はしたことがなかった。正直、去年に1回でもしたかったと今になり思う。去年は子どもを見る際、言葉通りの見るしかしてこなかった。今もそうなっているかもしれない。しかしながら、大学院やカンファレンスの学びからも、ただ見るだけでなく、子どもがその時にどう感じているのか想いの部分や考えを合わせた状態で見ている。

金カンをはじめとした大学院での学びはここ最近になりとても良い場なのだと感じた。これは去年、分からない場、話をしなければならぬ場と個人的には少々不安になりながら学んでいった。今年になり、カンファレンスなどに出てみて感じたのは、今日これに出て良かったなと思えた瞬間であった。このリアルタイムの想いを大切にしたい。

他者とのコミュニケーションは少しずつ成長していくが、今年は特に他者と話す機会が多い。私は1つの事物に対し時間を掛けて考える。時にそれは必要であるが、他のコミュニケーションスタイルも試していきながら、オーバーラップしていき、改めて自分の個性に合わせて確立していきたいと考えている。



ミドルリーダー/マネジメントコースだより

2年目に向けて

学校改革マネジメントコース2年/さくら認定こども園 上野 慧美

早いもので、新年度がスタートして1か月が経とうとしている。今年度は新しく入社した職員がいままのスタートとなってしまったが、それでも先生達が新しいクラス、新しい子ども達と一緒に頑張ろうという気持ちで新年度を迎えているのが、印象的である。今までは新入社員がいたため、新年度頑張ろうという空気は新入社員のフレッシュな気持ちが周りの職員にも伝わって作り出しているものかと思っていたのだが、新入社員がいない事で、そうではない事に気付かされた。持ち上がりのクラスであっても、新しいクラスを頑張ろうという先生達の気持ちとクラスが上がってお兄さんお姉さんになったという子ども達の気持ちが新年度のワクワクした空気を作り出しているのだなと気付かされた。

さて、今年のさくらの年間目標は「子どもと保育者が響き合う共主体の保育へ」である。昨年、今まで「子ども主体」の保育をしてきたが、それによって子どもに振り回されていないだろうか？子ども達の活動を見守るだけになっていないだろうか？保育にねらいを持って出来ているだろうか？など課題が出てきた。そこで、今年は、子ども主体からもう一歩すすんで、保育教諭も主体の一人として子どもと関わり合いながら、遊びや活動を楽しんでいこう、というものである。「子ども主体」を大事にしすぎて、子どもに考えさせるために、先生が引っ張ってはいけない、意見を言うてはいけないという思いが職員の中にあるように思う。それも大切であるが、先生も保育の参加者の一人として、意見を言えればいいし、活動も一緒に楽しんでいこう、という目標である。

昨年は、保育の質を高めるために、公開保育研究会、年齢別研修、担任交代、クラス別研修、さくらラウンドテーブルなど様々な事に取り組んできた。その中

で、福井大学のラウンドテーブルの参考にした「さくらラウンドテーブル」に、聞き手として参加した園の園長先生が、今年うちの園もさくらを参考にしてラウンドテーブルを開催する事にしたので、是非来て下さいと招待された。こうして、大学院での学びが大学院の枠を超えて広がっていく事が嬉しく思う。昨年、上記の取り組みをしてきて思ったのが、さくらの先生方は「今年からこういう取り組みをやってみます！」と言うと、「分かりました！」と小さな一歩でも実践してくれて、終わると「楽しかったです！」と何でも前向きに取り組んでくれるのである。それがさくらの良さであり、さくらの保育の質を高めてくれる原点であるのかもしれないと思っている。そして、小さな一歩でも実践してくれる先生方のために、私は働きやすい環境を整える事が仕事であり、そのためにもう一つのテーマである「働き方改革」も行っていかないといけないなと思っている。

さて、それでは肝心の子ども達の保育はどうなのかというところ…始まったばかりで、どのクラスもプロジェクトの芽が出始めたばかり。5歳児ではお散歩先で出会ったおじいさんから教えてもらった飛行機プロジェクトやマーチングからの楽器プロジェクト。4歳児は子ども達が大好きな松ヶ枝公園の遊具からの宇宙人プロジェクトや電話プロジェクト。3歳児は昨年から続いているお団子・おにぎりプロジェクトとチューリップを見に行った事がきっかけのお花プロジェクト。1年間このプロジェクトがどう展開していくのか、年間目標である「子ども達も先生も共にわくわくしながら育ち合いながら」保育する事ができるのか、さくらの新たな試みを一緒になって楽しみたいと思う。

論理と感情に向き合う

ミドルリーダー養成コース2年/奈良女子大学附属中等教育学校

山口 琢士

教職大学院での学びと、学校現場での実践を往還させる日々の中で、私は今、教師としての「自律性」と「同僚性」の在り方を問い直している。本校での勤務は7年目を迎える。今年度は生徒指導部長として仕事をする事となった。これまでの6年間、中学3年生から高校3年生までの持ち上がり、その後は中学1・2年生の担任として全学年の生徒と深く関わってきた。立場が変わることとなったが、昨年度の大学院での学びを経て、私はこの立場に立つうえでの「構え」を既に手にしていたように思う。集中講義やカンファレンスを通じて多様な立場の方々と対話を重ねる中で、私がこの学校で果たすべき役割を見出すことができていたからである。

私の実践の核にあるのは、昨年度から開始した有志の研修会である。本校には職員室が存在しない。それぞれの先生がそれぞれの教科の部屋や分掌の部屋に点在している。この物理的な制約は、教師間の自発的な対話を阻む壁となり得る。だからこそ、教師同士がじっくりと語り合う場を創る必要があった。また、この場には生徒を招く試みも行った。そこで痛感したのは、学校の主役である生徒を抜きに教師だけで話を進めていくことの危うさである。生徒の意見を聴き、共に対話する中で、教師こそが生徒から多くのことを学んでいるのだという事実改めに気づかされた。この研修会を継続する中で、私には心強いコアメンバーという仲間ができた。彼らと共に、公開研究会では全国の教員と本校を含む奈良市の高校生が共に語り合う「ラウンドテーブル」を実現し、対話が持つ力を確信するに至った。

今年度、このコミュニティはさらなる深化を見せている。昨年度は私自身が全ての会でテーマを設定し、場を創ってきたが、今年度はコアメンバーがそれぞれに抱く同僚や生徒と考えたいテーマを掲げ、自走し始めているのだ。そんな中、私自身は、生徒指導部長として生徒指導のケーススタディを研修の柱に据えたいと考えている。それは、我々の「判断力」を磨くための試みである。現代の教育現場において、保

護者の眼差しや社会的状況の複雑化により、教師が自ら決断を下すことへのプレッシャーはかつてないほど高まっている。しかし、教育の本質が対人関係にある以上、正解がどこかに書かれているわけではない。仕事の本質とは、自らで判断し、行動することである。判断力とは、実際に自らが責任を持って判断を下し、その結果を振り返るというサイクルの中でしか身につかない。判断を回避し続けていては、プロフェッショナルとしての力は停滞する。この研修会では、同一のケースに対して自分自身の判断を他者に伝わるよう言語化する。その上で他者の判断を聴き、なぜ自分はその決断に至ったのかという自身の判断軸を問い直していく。そこで重要視したいのは、単に「どう動くか」という手法の是非ではなく、他者の判断が「なぜそのようになされたのか」という背景にある論理や価値観を知ることである。これまで私が生徒を理解し、接する際に大切にしてきた個別の背景や論理を深く見取るという姿勢を、今年度は対教師においても実践していきたい。それぞれの教員が持つその人ならではの判断を認め合い、そのプロセスをさらけ出し、すり合わせていく。自分の判断を自信を持って表明し、批判的に、かつ建設的に検討し合える関係性こそが、今この現場に必要な同僚性の姿である。

新年度が始まり1か月が経った。私は意識的に校内を歩き、教職員一人ひとりのもとへ足を運び、対話を重ねている。特に生徒の様子について話を聞いてきた。しかし、話を聞けば聞くほど、他者の語りを通じて生徒の様子を捉えることの限界も感じている。重要なのは、その人がなぜそのように生徒を見るのか、あるいは、なぜそのように話をするのかである。表面的な状況報告の裏にある論理と感情を、冷静に、かつ温かく捉える洞察力の獲得が今の私には求められている。その洞察力を磨き上げ、過去の自分やこれまでの職場にも目を向けて長期実践報告書を書き進めていく。

“完璧”ではない自分と向き合い、 “みんなと一緒に創る”を目指して

ミドルリーダー養成コース2年/草津市立老上こども園 木戸 香里

大学院に入学して、早くも2年目を迎えた。そして、老上こども園で研究主任としての勤務は3年目となり、大学院入学のきっかけになった園内研究会の取り組みについても、少しずつ軌道にのりつつあると感じているところである。

大学院入学を目指したのは、園内研究会推進の難しさを感じたからである。異動当初は、忙しい日々の中で、研究会に参加する時間を負担に感じている職員が多く、保育のことを語り合うよりも、保育準備や事務時間の確保が優先的になり、自分たちの保育をふりかえったり、保育の中で大切にしたいことを職員で共有したりすることが難しかった。

昨年度は、大学院での学びを活かし、担任たちと時間をかけて話し合い研究主題の設定をし、みんなが“子どもの姿を語る”ということを中心にしながら研究会を進めてきた。私がこの老上こども園に異動してきた当初の頃のことを思うと、“みんなが研究主題を考えた”“捉える子どもの姿を明確にした”という実際に行った回数だけで「だんだん上手く進んでいる」と、感じていたのかもしれない。けれど、園内研究会開催前は毎回不安になりとても緊張している自分がいた。そのことを4月のカンファレンスで話したところ、私の話す文脈からファシリテーターの先生が「先生は、その研究会の中に何か一つの正解を見つけようとしていない？」と言われた。胸が高鳴った。順調に進み始めていると思っていた園内研究会だが、なにかしっくりこない。と感じているところがあつたからである。きっと私は、“スムーズに研究会を回さないといけない”“しっかりと進行しないといけない”ということにとらわれすぎていたのだと、そ

の時初めて気づかされた。私はずっと、“充実した園内研究会をしたい”という思いで無我夢中で突き進んできたが、“充実した”とは、どのようなことなのか、じっくりと考えることなく2年間進んできたことに今さらながら気がついた。今一度立ち止まって私が願う“充実した”とは一体どういったものなのかを考え直さなければならない2年目のスタートになった。

今後の研究会は、研究主任である私が一人で進めるのではなく、みんなを巻き込んで様々な形を試したり、時には誰かに任せたり、助けてもらったりしてもよいのではないかと気づいた。みんなで悩み、いろいろ試しながら進んでいくことが、“みんなと一緒に創る”ということなのではないかと気づいた。また、私が思う“充実した園内研究会”とは、職員一人ひとりが子どものことを大切に思い、そのためにより有効的な保育環境や援助について考え、新たな気づきをして明日へとつながる保育を目指すことである。そのためには、自分にはなかった考えや、一つの場面からでも様々な子どもの捉え方があるということを知ったり、多様な考えに出会ったりすることが大切である。自分一人の狭い世界に閉じこもるのではなく、自分を拓き、他を知り、互いの異なる部分の共通点を探ることが、豊かな保育に繋がっていくのではないかと感じる。一人で焦らず、仲間とともにゆっくり歩みを進めていこうと思った2年目のスタートである。この気づきをさせていただいた、ファシリテーターの先生や、同じグループの仲間感謝しながら、これからもゆっくりと実践を続けていきたい。



4 月月間合同カンファレンス報告

ここが私の現在地

授業研究・教職専門性開発コース 2 年/福井県立武生高等学校 水島 慧子

私は現在、M1 の頃から引き続き、武生高校においてインターンをしている。インターンでは、多くの先生方の授業を参観し、実践授業をしている。その中でモヤモヤ感を感じているため、4 月に行われた合同カンファレンスにおいて、真剣に向き合ってみた。今回のニュースレターにおいては、このモヤモヤ感に向き合った合同カンファレンスを振り返り、私の現在の考えについて記録していこうと思う。

まず 1 日目において、私自身の過去と現在、未来に向き合った。このとき私は、私の専門である生物を中心とした、授業の視点で向き合ってみた。以前の私は、授業に対しての考えが固定的であったと思う。生徒にとって、探究をすることは良いことであるという考えである。それが、武生高校でインターンをする過程で、「受験」のための授業を求めている生徒の姿に出会った。当初の私は、この姿にすごくモヤモヤ感を抱いていた。それは、課題研究をしたり、授業内で悩みながら考える生徒の姿が、とても生き活きとしているからだ。しかし、生物などの教科における授業の中では、生徒からも「受験」に向けた授業の方が良いというような言葉があるほど、探究することが必要とされていなかった。このような生徒の姿がある中で私は、生徒が何かしらに興味を持てる活動がしたいと思い、生物基礎において実践してみた。実践においての生徒は、授業内外も気にせず、学びに没頭している姿が見られた。その中でも、「受験」への意識があるのか、私が生徒の意見をまとめると、すぐにメモを取る姿も多くみられた。さらに、まとめてほしい、教えてほしいという視線を強く感じた。このような生徒の姿を目の当たりにして、現在の私は、探究や受験だけに囚われず、生徒の姿に合わせた授業の方法を模索し、学びの内容なども考慮しながら、授業を生徒とつくっていくことが、インターン生としてできるのではないかと考えるに至った。このような考えに至ることができた 1 日目であった。

2 日目は、卒業された先輩の長期実践研究報告を検討した。私は、岩佐帆花『向き合い方を問い直す—「人」と「人」と向き合い、ともに学ぶために—』福井大

学大学院福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学連合教職開発研究科(連合教職大学院)学校改革実践研究報告 No. 683、2026. 2 の検討をした。この報告を検討するに至った理由として、同じインターン先であった、岩佐さんの見取りに感動し、弟子入りしたことにある。私自身、岩佐さんの長期実践研究報告を読んでいる際に、「何のために見取りをするんだっけ?」、「見取りって何に役に立っているの?」と疑問が浮かびつつ、「今の私は、授業内容を見ているだけだな」と思っていた。以前の私ならば、「見取りは生徒の学びの過程を見て、授業に繋げていくためにするものだ」とスパーンと答えていたと思う。しかし、時間が経過する中で無意識のうちに、私自身の授業を成り立たせるという目的のために、授業内容を見ることに焦点が合っていた。岩佐さんの長期実践研究報告には、『その人自身について知りたかったのである。そのために生徒を見取ることが必要だった。』という言葉があった。私は、この言葉を理解できておらず、「なぜ人を知りたいの? 人を知って何になるの?」という意識を持ったまま、グループでの検討に臨んだ。すると、それを見透かしたように、「何のために見取りをしているの?」と質問された。痛い所を突かれた。私は、「生徒の学びの過程を見取るため」というような表面的で曖昧に答えたように思う。すると、質問された先生は、自身の授業を振り返り、「子どもたちの姿を見て、授業に繋げていくための見取りだ」というような言葉を残された。この言葉に私はハッとしました。それは、初心に戻った感覚だったからかもしれない。さらに、私の実践授業を参観しての見取りを、岩佐さんから共有していただいたときに、自然と、見取りを授業に繋げていたことに気が付いた。「なんだ、私も見取りを活かしてるじゃん!」と思った。しかし、岩佐さんの見取りは活かしていても、その学級で授業をすることはない、インターンでの自身の見取りは活かしていない。「どうやってインターンでの見取りは活かされるのだろうか? 何のためにインターンで見取りをするの?」というように、授業をする学級でもない、インターンにおける見取りへの

モヤモヤ感が生まれた。このモヤモヤ感に向き合ってみたところ、現在の私は、インターンにおける見取りの目的として、いろいろな生徒の姿を知るためだと考えるに至った。たとえその学級で授業をせずとも、生徒の躰き、気付き、疑問などのポイントを見取りによって知り、そのポイントを別の学級で活かしていけると思う。そのための見取りだと思う。

私は、今回のカンファレンスにおいて、自身のモヤモヤ感に向き合いながら、現在の私の考えを位置づけてきた。この考えは流動的であり、日々変化していくと思う。現に、本ニュースレターの執筆中も考えが変化している。そのため今後とも、モヤモヤ感に向き合いつつ、自身の考えをアップデートしていきたい。

「自分らしさ」が響き合う学級社会の創造を求めて

授業研究・教職専門性開発コース 2年/福井市中藤小学校 田中 志音

1. はじめに：世代を結ぶ「鏡」としてのカンファレンス

教職大学院での学びが2年目に入り、開催された4月間カンファレンス。M2となった私にとって、この2日間は昨年度の葛藤に意味を与え、今年度の実習に向けた確かな指針を確立する、極めて重要なプロセスとなった。

2. 教育改革の吟味：「自らの人生を舵取りする力」の原動力

第1日目は、文部科学省の「論点整理」等の資料を基に、21世紀の社会に求められる学びのあり方を検討した。予測困難な時代において、子供たちがしなやかに「自らの人生を舵取りできる力」を育むことが、次期学習指導要領に向けた一貫した方向性である。

グループ対話の中で焦点となったのは、この「舵取りする力」を支えるエンジンの在り方だ。私はこれまでの実践で、学びのきっかけを「fun（単なる楽しさ）」に求めていたかもしれない。しかし、対話を通じて、真の学びのエンジンは「interest（知的好奇心・関心）」への昇華にあると気づかされた。「分かっているつもり」だった事象に問いが生まれ、既存の知識が揺さぶられるプロセスを経て、他者との対話を通じて自己を更新していく。この知的な「快感」を伴う学びこそが、豊かな人生へと繋がる姿である。

3. 長期実践報告との対話：授業と学級経営の「一貫性」を求めて

第2日目は、本大学院を修了された伊達あさひさんの長期実践研究報告「ふとした瞬間、気づいた変化」を精読した。伊達さんの歩みを「鏡」として照らし返したとき、私は1年間にわたる自分自身の「内なる葛藤」に一つの答えを見出すことができた。

私は昨年、小学校1年生のクラスでのインターンシップを通じ、次第に子供同士の関係性が築かれ、互いに学び合う学級へと変容していく姿を目の当たりにしてきた。その経験から、私の関心は「学級経営」へと強く引き寄せられていった。しかし一方で、私は「自分は元々授業づくりに関心があったはずなのに、学級経営に惹かれる自分には一貫性がないのではないか」という悩みを抱えていたのである。

しかし伊達さんの報告書は、その二つが繋がっていることを教えてくれた。伊達さんのメンター教諭の言葉、「授業が学級経営に繋がると子供と教師の人間関係が築くことができ、学級経営が授業に繋がると子供同士の関係を築くことができる」という視点は、私の中にあつた壁を取り払った。

私が昨年見てきた1年生の姿も、まさにこの往還そのものであった。授業中のグループ活動で培われた信頼関係が学級の安心感を作り、その安心感がまた授業での「分からない」と言える勇気に繋がっていたのだ。

伊達さんの到達した「学級経営という広い土台の上に授業が成り立つ」という視点は、「授業づくり」への関心と「学級経営」への探究心が一貫した一つの物語であることを確信させてくれた。

4. 結びに代えて：伴走者としての覚悟

「教職大学院は待っているだけでは何も学べない」という言葉の真意を、今ようやく自分のものとして受け止めている。今回のカンファレンスで得た「教育改革の視点」と「先輩の生きた実践の手がかり」を糧に、私は子供たち一人ひとりの存在を丸ごと受け止める伴走者として、2年目の探究をより誠実に、より意識的に進めていく決意である。

何のためにそれを行うのか

授業研究・教職専門性開発コース 2年/福井県立羽水高等学校 由比 亮成

今回の月間カンファレンスは、教職大学院での一年間で持つようになった課題意識をより鮮明にし、本年度の目標について考えるうえで大きな助けとなった。対話を通して、教育現場におけるあらゆる活動の根底には、「何のためにそれを行うのか」という問いがあるということが強く印象に残った。話題に上がった教員間の同僚性のあり方と、生徒の探究学習における主体性の欠如という一見異なる2つの課題には、「納得感」と「自分事化」という共通性があるように思う。

私は、教職員が連携して動く際、教員間の関係性は重要で、最も重要なのは教員間の心理的安全性である。心理的安全性は、生徒指導における「安全・安心な風土」と類似したものであるという認識があった。しかし、対話の中で、そもそも同僚性はなぜ必要なのかという問いが出てきた。単なる仲の良さは時に馴れ合いによる「同情性」へと変質し、逆に厳しい叱責が飛ぶような関係では支え合いは生まれない。「真の同僚性とは、互いの教育観を共有し、その違いを認め・高め合う集団のあり方ではないか。」個々の生徒に適した支援を選択する際、教員同士の対話を通じて納得感のある指針を作ること。このプロセスこそが、多様な生徒に向き合うための教員の土台となるという学びを得ることができた。

私は、本年度、生徒の探究活動を見取り、その助けになりたいという目標がある。対話の中で、探究についても学びを得ることができた。ある先生は、高学年

になるほどネットで調べれば済む問いを立てがちで、低学年のような素朴で身近な違和感から問いを立てる姿が見られなくなるということに問題意識を持っていた。探究の原点は、素朴で身近な違和感にある。探究の成果によって社会に貢献できるかという視点もあるが、何のために探究をするのか。課題発見こそが最も重要であると思う。自らの問題意識から始めることで、現状と探究のゴールとの距離を測ることや、血の通った問いを立てることができないのではないだろうか。例えば、「観光客を増やす」というテーマを掲げる際、具体的な問題意識を持っていなければ活動は迷走することになるだろう。また、探究のテーマは本来、活動の進展に合わせて流動的であるべきだと考える。活動を通じて問いが洗練され、形を変えていくことが自分事となった学びの深まりの証になる。

学習指導要領についての対話の中で、「自らの人生を舵取りする」というフレーズに注目した。私は、自ら進む先を決める船頭の力、すなわち「自分が何をしたいか」を描く力であると思う。そして、教員の役割は、生徒の「したい」という熱量を、社会的な実現可能性など、別の視点からの気づきを与える伴走者としてのものになる。生徒が自らの発意から問いを立て、試行錯誤の中で問いを磨き上げていく探究活動になるよう、生徒の思いを引き出すことを念頭に置いて今年一年間を過ごしていきたい。

From Questions to Clarity: A Reflective Learning Journey

ミドルリーダー養成コース 2年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程 Aysha

This month's two-day conference did not feel like a typical academic event; it felt more like a journey that slowly unfolded. I walked in with plans, ideas, and a sense of direction for the year ahead, thinking I would simply add a few more insights to what I already had. Instead, the experience gently challenged those ideas and reshaped them. It did not replace my plans, but it

made them clearer, more grounded, and more realistic.

The first day, centered around the OECD Teaching Compass 2040, opened up a much wider view of education than I had been holding. As we moved through the discussion, I found myself rethinking what teaching actually means. It is easy to see teaching as a role focused only on students' learning outcomes, but the

conversation kept bringing us back to teachers themselves, their growth, their well-being, and their place within the system. The idea of well-being through being, belonging, and becoming stayed with me. It reminded me that education is not just about reaching goals but also about who we become in the process and how we connect with others along the way.

At one point during the discussion, a colleague raised a simple but powerful question: “What kind of curriculum exists in your country? whether it is knowledge-based, skill-based, or constructivist-based?” That question did not end in the room; it followed me long after the session. It made me think deeply about the realities of education in Pakistan, where systems are still dealing with foundational challenges. I began to wonder how frameworks like the Teaching Compass fit into such contexts. Can they be applied as they are, or do they need to be reshaped? These questions stayed with me, not as problems to solve immediately, but as thoughts to carry forward.

Another idea that quietly stayed in the background was *ikigai*, the idea of finding meaning and purpose in what we do. At first, it felt like one of those concepts that sounds inspiring but slightly distant from everyday practice, something you appreciate in theory but do not immediately connect with your own work. But as I sat with it longer, I realized that it was already pushing me to reflect on my own direction as an educator. It made me question not just what I plan to do, but why I want to do it, and whether my goals are connected to something deeper than just completing tasks or meeting expectations. I began to see that without this sense of purpose, even well-planned ideas can lose their meaning over time. So even before the second day began, this concept had already started to shift my thinking, encouraging me to look beyond plans and outcomes and think more carefully about intention and direction.

The second day brought us into a very different space through the reading and discussion of a long-term practice record. This

time, it was not about frameworks or future visions, but about lived experience. As we went through it, I began to see what teaching looks like when it meets reality. Plans do not always work, collaboration is not always easy, and time is often limited. Yet, within all these constraints, there was a continuous effort to keep going.

What made this experience particularly meaningful was how it gave shape to the idea of *ikigai*. It was no longer abstract. Through this journey, it became clear that purpose is not something you suddenly discover. It develops slowly, through everyday decisions, through small efforts, and even through struggles. The challenges, the adjustments, and the persistence all became part of building that meaning. It made me realize that finding purpose in teaching is less about achieving something big and more about staying engaged with what we can do in the present.

This is also where the idea of flexibility became very real. It was not just about being open to others’ ideas, but about continuously rethinking one’s own approach. Teaching did not appear as a fixed method but as something that keeps changing with context, with students, and with circumstances. It became clear that there is no single way that works for everyone, and that responding to differences is not an extra effort, but a central part of the process.

As the two days came together in my mind, I realized that they were not separate at all. The first day expanded my thinking, while the second day grounded it. One raised questions about systems, possibilities, and ideals, while the other showed what those ideas look like in real classrooms, within real limitations. Somewhere between those two, I began to see a clearer picture.

Looking back, what I take from this experience is not a set of answers, but a way of thinking. It is the ability to question, to reflect, and at the same time to continue acting within reality. I am still in a phase of exploring my direction as an educator, and this conference made me more comfortable with that uncertainty.

It reminded me that it is okay not to have everything figured out. What matters is to keep engaging, to keep reflecting, and to keep moving

forward. And maybe, along the way, clarity does not come all at once. It builds slowly, just like everything else.

対話と省察を紐解く

ミドルリーダー養成コース2年/富山市立中央小学校 堀 芳聡

二年目の合同カンファレンスがスタートした。先生方と対話を重ねながら、昨年度の自分の研究を省察し、今年度の研究の見通しをもつことができた。特に、これまで自分が大切にしてきた実践や価値観が、他者との対話によって揺さぶられたり、再構築されたりする過程に大きな意味を感じた。

対話を重ねる中で、それぞれの先生方がこれまでの教師人生をふり返り、どのようなことを感じ、どのように行動したいかを語っていた。その語りには、それぞれの経験に裏打ちされた重みがあり、自分自身の在り方を問い直す契機となった。また、異なる実践や立場からの意見に触れることで、自分一人では気付くことのできない視点を得ることができ、対話のもつ力を改めて実感した。

今年度は、初めての小学1年生の担任になった。今年度実践したいことが大きく分けて2つある。1つ目は、スタート期における対話と省察を実践したい。学級の実態は、34名の児童が在籍しており、交流級の児童が3名いる。また、通級に通っている児童は7名おり、診断が付いていたり、療育中の児童も多々いる。外国籍の児童も多くいる。一見見れば、大変な学級といえるであろう。しかし、私は2年前同じような環境下におり、それがきっかけで教職大学院に入る契機となった。それがゆえに、多様な児童が多く在籍する中で、一人一人の特性を生かすも殺すも教師次第ということを実感している。さらに言えば、その特性を「課題」として捉えるのではなく、「可能性」として捉え直すことが重要であると考えている。

そこで、カンファレンス後に昨年度もお世話になった富山国際大学の岩崎直哉先生に学級を実際に見に来ていただき、一緒に再度どのような研究方針を進めていくかを考えさせてもらった。1年生は、6年間の土台をつくるとても重要な時期である。もちろん規律も大事であるが、本学級の実態的に、それだけでは上手いかわない。むしろ、子供一人一人が安心して自分を表現できる環境づくりこそが、規律の内面

化につながると考える。そこで、今年度の方針の素地として、「褒める」ことをテーマとして掲げていく。

友達の考えを褒めることで、自分の考えのよさや課題に気付き、自分の意見を形成できるように、価値づけの言葉や比較の視点をもたせていく。また、単なる称賛にとどまらず、「どこがよいのか」「なぜよいのか」といった具体的な言語化を大切にすることで、思考の質を高めていきたい。他者に目を向ける視点に変化してくれば、対話の様子も変化し、言葉も豊かになってくるであろう。ペアで繰り返し対話をする中で、だれもが違う話をせず、対話し続けられるように対話を鍛えたい。さらに、ふり返りも鍛えたい。学習内容だけでなく、自分の学びや学び方のふり返りを継続することで、次時の学びや自分の生き方に還元できるようにしていきたい。そのために、口頭でのふり返りと簡単な記述を組み合わせ、段階的に書く力も育てていく。

2つ目は、幼小接続である。昨年度からこども園の先生方と対話する中で、小学1年生とのギャップや1年生の学校嫌いが激しいことは何度も耳にしていた。しかし、本校では、年始、年に1回の形式的な交流、年度末の大きく分けて3回のみでの接続にかぎられていた。そこで、管理職の先生に許可を得て、校区の幼稚園、保育園、こども園に電話をかけ幼小接続を本格的に進めたい意思を伝えた。幸いにも同じ思いでいてくれた園がほとんどであった。

すぐに参観させてもらい園の先生と対話を重ねた。土台作りから対話をしながら一緒に持続可能な幼小接続をしたいと話合った。また、全ての園を訪問した後は、小学校に先生方が集まっていたので、今年度の方針や計画をすり合わせながら決めていくつもりである。今年度が土台となり、長きに渡りスタートカリキュラムの大きな柱である幼小接続が文化になるように、省察をしながら行動に移していきたい。

園を参観し、まず驚いたのが環境の違いである。目につくところ、そこらじゅうに遊び場が存在して

おり、子供たちが自由に選択しながら遊んでいる。先生に「だれだれとこうしなさい」と指示されなくても、自分たちで自分のやることを自己選択しながら遊んでいる。その姿から、主体性や対話の基盤は遊びの中で育まれていることを強く感じた。この学びを小学校の教育活動にどのように接続していくかが大きな課題である。

現在年間計画の案を考えている。子供同士の交流、先生同士の交流、地域との交流も視野に入れながら、この重要な接続期の子供たちの環境を整備したい。また、交流の回数や内容だけでなく、日常的な情報共有や相互理解を重視し、継続的な関係づくりを目指していく。富山国際大学の河崎美香先生にもアドバイスをいただきながら、県内そして全国の取り組み

を参考にしながら進めていっている。こどもを真ん中に見据え、子供だけでなく、教師、地域、学校、企業等が連携を図りながら、民主的でよりよい教育の基、よりよい社会を創っていきたい。

今年度は、この大きな2つの取り組みをA(見通) A(行動) R(ふり返り)のサイクルを柔軟に取り入れながら実践していく。カンファレンスでは、既に多くのヒントをもらっている。カンファレンスを積み重ねる毎に多様な見方や考え方が培われ、自己の実践を相対化することができる。観の転換が起こる。その変化を大切にしながら、これからもカンファレンスで多くの方々と対話を重ね、様々な見方・考え方を取り入れながら研究を進めていきたい。

4月合同カンファレンスを終えて

学校改革マネジメントコース2年/草津市立玉川こども園

中川 珠紀

2日間の合同カンファレンスを終え「語る」ことの難しさを感じた。昨年も同じように合同カンファレンスに参加したが、慣れてきているはずの「語り」がより難しく感じたのはなぜだろうかと思う。

1日目の三つの種の語りでも思った。もちろん昨年度とは全く同じ内容ではないが、過去の自分について、現職場での自分について、長期実践に向けた自分について、語るたびに頭の中で「なぜ？」という、問いばかりが浮かんでいた。これまでの自分の歩みや現在の職場については、昨年度と大きな変化はない。語る中で、その時の思いや感情が、「今ならこう思うのに」ということがよぎってきたこと、そして、カンファレンスで同じグループの中に、他校種の先生方がいるということも「語り」が難しく感じた要因である。現在の職場について語る中で、「保育所と幼稚園って、どう違うのですか」「環境をつくるってどういうことですか」「地域教材を取り入れるってどうしてですか」など、自分が疑問にも思わなかったことが、他校種の先生方には当たり前ではないのである。全く知らない人に、わかるように語るということの難しさを感じた。子どもや保護者、職員にもこうした自分の中のあたりまえで語っていることは、ないだろうかと思いを振り返った。今まで通り過ぎてき

たことに立ち止まり、新たな「問い」を生むこともこのカンファレンスの良さであるといえる。

また、合同カンファレンスでは、改めて「教育改革の展開を吟味すること」の意味を、自身の歩みと重ねながら深く考える機会となった。これまで私は、園長として日々の園運営や職員配置、保護者対応など、目の前の課題に向き合いながら実践を積み重ねてきた。その中で大切にしてきたのは、「子どもたちの姿を起点に考えること」、「組織としての質を高めること」である。しかし、今回のカンファレンスを通して、それらの実践が、どのような教育観や改革の流れの中に位置づいているかを問い直す機会でもあった。現在の職場は、経験年数をはじめこれまでの経歴など、様々なことが異なる職員が混在し、組織としての一体感や実践の質にばらつきが生じやすい状況にある。そのため、特定の職員に負担が生じやすく、平準化しない構造にある。これまででは、個別指導や調整を行うことで乗り越えようとしてきたが、今回の学びを通して、個の力量の問題としてではなく、「組織として学び続ける仕組み」の弱さに起因しているのではないかと捉え直すようになった。

教職大学院での学びは、こうした視点の転換に大きく寄与している。理論と実践を往還する中で、実践

を言語化し、他者と共有し、再構成していくプロセスの重要性を実感してきた。例えば、子どもたちが話し合いを通して生活をつくる力を育てている実践や、好きなことを極める中で、主体性を発揮する姿は、単なる日常の成果ではなく、意図的な環境構成と関わりの積み重ねによるものである。これらを職員間で十分に共有していくことがより実践を広げていくこと、その土台となるのが「対話」であることの意味を理解することができた。

さらに、カンファレンスで互いの実践を語り合う中で見えてきたのは、「語ること」そのものが実践を深化させるという事実である。他者に語ることで、自分の実践の意味付けが明確になり、同時に他者の視点から新たな気づきを得ることができる。また、様々な校種間や異なる立場、経験をもつ実践に触れ、自分や自園の当たり前を相対化することで、改善の方向

が見えてくる。この往還こそが、教育改革を「自分ごと」として捉えるための鍵であると感じた。

合同カンファレンスを終え、今後の展望としては、先ず、園内において「実践を語り合う文化」を意図的に育てていきたい。そのためには、単なる報告や反省ではなく、「なぜその実践を行ったのか」「子どもにどのような育ちが見られたのか」といった本質に迫る対話の場の設定や、主幹をはじめ園の中核となるミドルリーダーの育成にも力を入れ、園全体で実践を支える体制を整えていきたい。

教育改革は、制度や方針の変化だけで進むものではなく、現場の実践が問い直され、更新され続ける中でこそ、実現されると言える。その意味で、今回の合同カンファレンスは、自身の実践を見つめ直し、次の一步を考えるための重要な契機となった。

関わり合い・学び合いから見えるもの

学校改革マネジメントコース2年/埼玉県立総合教育センター 長谷部 福一

福井大学教職大学院に入学して、2年目となった。M2の先輩方が修了し、新しいM1の院生を迎えての4月のカンファレンスである。1年前はとにかく学びに向き合っていきたい気持ちで我武者羅に臨んだ4月のカンファレンスであった。本年度初のカンファレンスにはどこか落ち着いて臨むことができたのではないだろうかと思う。東京サテライト会場は、M1の院生がたくさん入学され、M2の院生の2倍の人数がいる。どのM1の院生からも、すごい熱量が伝わってきた。これは、あれは、と質問もどんどん飛んでくる。それに対して、わりと労せず答えられる自分がある。この1年でどれだけのものが自分に蓄積されていたのかが実感はなくとも、分かる瞬間である。少し嬉しくもあり、でもまだまだだなと思う自分がある。ただ改めて思うのは、私は多くの人との関わり合いの中で、自分の素地となる大切なことを学び合ってきたと感じている。

4月のカンファレンスは実践的な自己紹介から始まる。三つの種として、①これまでの実践の歩みと教職大学院で取り組んできたこと、②現在の職場の状況とそれを踏まえた今後の展望、③長期実践研究報告についての展望について語り合う。過去を省察し、現在の位置を確認し、未来を描いていく流れである。

過去は、昨年度の勤務校で、探究的な学びをテーマに、教職員の目線をあわせ、主体性を引き出し、教科・学科を超えた対話を生み出し、協働的に学び、組織としてまとまって機能させることを意識して、様々な声掛け、働きかけを行ってきたことについて紹介した。探究的な学びの教職員研修会を5月に実施し、探究的な学びをするための時間を作り出すために生成AIを効果的に活用するための教職員研修会を11月に実施した。9月にグランドデザインを策定し、目線あわせ、対話のプラットフォームとしても活用していった。生徒に問いを立てることが得意か、探究活動はワクワクするか、課題解決に取り組むことは楽しいか、先生たちは質問や相談しやすいかなどアンケートを実施し、取組の一つの成果指標として、振り返りもしっかりと行った。

現在は、人事異動により学校現場から埼玉県立総合教育センターの勤務となった。その中で、所外との関わり合いや、幹部や各担当との関わり合いを調整し、センター全体の企画を打ち出していくという企画調整担当の任についている。幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校と多くの校種の人たちと関わり合うことができ、新たな気づきや刺激がある職場である。

昨年度は大学院での学びを勤務校で実践し、それを省察するという、まさに理論と実践の往還を体験しながら学びを進めてきた。今年度は、どのように取り組んでいくか思案中であるが、教職員に学び続けることについて説いてきたことを、形は変えても現在の職場でも実践していきたいと思っている。教頭レジュメというものを作り、職員会議を通じて、指示連絡とともに学びの情報を発信してきた。そのイメージをベースに、GL（グループリーダー）レジュメというものを作成し、担当の会議で5分程度という短い時間ではあるが、毎回学びの情報を発信していきたいと思っている。実際、このニュースレターの執筆中に、最初のGLレジュメを作成している。担当会議でどのような反応があるか楽しみである。そのようなしなかけを、また大学院に持ち帰って省察し、次の実践につなげていく予定である。

昨年度、M2の先輩方の動きを見てきているので、長期実践研究報告の作成へのイメージはつかめているが、不安は尽きない。この4月のカンファレンスでは、歴代の長期実践報告を読み込み、それを共有する時間が設けられていた。学校現場から教育行政に異動された方のものを読ませていただいたが、とても良い刺激をいただくことができた。書き上げていくことを楽しんでいきたいと思う。周囲の院生仲間の意欲や活気を大いに感じる4月カンファレンスの2日間であった。修了生の方も大勢参加してくれて、まさしく切磋琢磨の充実した時間が過ぎた。M2の良いスタートが切れたと感じる。令和8年度もどうぞよろしくお願いいたします。

2年目の4月合同カンファレンス

学校改革マネジメントコース2年/岐阜市立加納西小学校 関 雅俊

1. 連合教職大学院での学び

大学院2年生となった4月。岐阜から福井へ向かう2時間。昨年と同じ道中なのに、福井へ向かう気持ちに変化が生まれている。流れる景色の中に桜の花が咲いていることに気付くように、今まで見えなかったものが見えるようになってきた。毎日がむしゃらに走ってきた学校での仕事。そんな私の毎日この大学院では、一度立ち止まる時間となっている。この時間は、自分の実践を見つめる大変よい時間となっている。4月の合同カンファレンスは、どんな出会いがあるのか胸を弾ませて大学の門をくぐった。

2. 2年目に掲げる目標

私は、「先生も子供も笑顔でいられる学校」を目指して学校マネジメントについて学んでいる。令和7年度は、先生方のつながりを生み出し、思いを共有できる環境を作った。若手もベテランも自分の思いを語る姿は、やはり教員なんだと思う。どの先生も子供のことを熱く語り、自分の実践を伝え合う。土台にある思いは同じなのだと感じた。1年間を通して、形はできたが、学級経営で思い悩む担任の姿は依然としてみられる。そこで2年目は「形から質」へと視点を変えていこうと考えた。具体的には以下の通りである。

① 年間を通した計画的な学級経営についての語り合いの場を設定する。（加西Tタイム※1）

※1 加納西ティーチャータイムの略。お茶を飲みながら上司に気楽に学級経営について話をする場。

② 月の学級経営の提案に核となる活動を取り入れ、具体例と共に実践できるような工夫をする。

③ 「教務のひとり言」の発信。核となる行事で大切にしたいことを週報で発信する。

④ 見たい先生の授業を見に行くことができる環境作り。

①については、4月からある学校行事や学級活動などをテーマとした実践を語り合うよう計画を立てる。若手中心でなく、ベテランも巻き込み、小グループで充実した時間となるようファシリテーターも位置付けて取り組む。

②③は、うまくいった例や失敗例も含めて、学級経営のポイントを「教務のひとり言」として発信していく。悩む先生の一助となるようタイムリーな内容とする。

④は、担任は全研や部研以外で、なかなか他の先生の授業や朝の会など見ることができないため、テス

ト時間など教務が代わりに教室で監督し、見に行くことができるようにする。

上記のような取組をする中で、担任が学級経営を楽しみ、力をつけていくことをねらう。担任が笑顔で教壇に立つことができれば、子供たちも笑顔になれると信じて今年度も取り組んでいく。

3. 4月合同カンファレンス

2日間にかけて「3つの種」「論点整理」「長期実践報告書」について自身の実践と重ねて語った。グループには、高等学校の教頭先生や幼稚園の先生、生徒指導主事の先生など様々な立場の方との出会いがあり、それぞれの視点が飛び交った。私は自分の考えを言葉にすることがあまり得意ではない。周りの人がすごいといつも感じている。しかし、この場では、う

まく伝えられなくても思ったことを話そうと思うようになった。なぜなら、その場には、話を受け入れてくれる雰囲気があるからだ。職場では気軽に尋ねることができないこともここではふと言葉にすることができる。

今年度、私が職場で実践していることも、私だけの偏った視点だけでなく様々な視点から見てもらい、自身の省察へとつなげていこうと思う。普段、職場では、がむしゃらに走っている私は、こうして実践を語り合うことが少ない。ここで出会った仲間は、私の心の支えとなっている。

長い教員人生の中で、自身を見つめる機会はなかなかない。この機会は、自身を成長させる時間として大切にしていきたい。

4月合同カンファを学んで -貴重な時を大切にしたい-

学校改革マネジメントコース2年/

特定非営利法人 AOZORA 福井 放課後等デイサービスほっこり AOZORA 瀧澤 治美

はじめに

三つの種で書いた、「実践と理論の往還」「実践をして、省察をする。振り返り、次への見通しをもつ、そして実践の理論をつくる」という言葉は、現在の私の実践を支えるものとなっている。日々の関わりを振り返り、そこに意味を見出すことは、AOZORAの支援を見つめ直す機会となっている。今後の長期実践研究では、一つの事例を丁寧に記述し、子どもの変化の過程で何が起きていたのかを明らかにしていきたい。行動の背後にある問いを読み取り、その問いにどのように応答してきたのかを、実践と理論を往還し、省察の質と時間性を意識しながら示していきたいと考えている。

私はこれまで、自分が支援の物差しとしていることは書いてはいけないと思っていた。しかし、「実践と理論の往還」「実践をして、省察をする。振り返り、次への見通しをもつ、そして実践の理論をつくる」というようなサイクルの中で、自分とのズレ、当事者とのズレ、支援とのズレ、職員とのズレを感じ問いが立ち AOZORAの支援はできてきたものだった。これからもその支援は更新され続けていく。この言葉に勇気づけられ、長期実践の記録を書いていこうと思う。

1. 教育課程企画特別部会論点整理を読んで

第3章(4)②【方向性と具体的論点】③特別の教育課程が実施される場所—特性等に応じた高度な内容は、研究的・探索的なものに想定されるため、在籍校の指導の他、一定の要件(例：発達段階に応じた学習環境や体制の整備)を満たし大学や研究機関等で実施される指導や学びを在籍校での学習とみなすこととする方向を踏まえつつ、具体の運用を検討すべき。

これを読んで、私の運営する放課後等デイサービスに通うプログラミングに特化した子どもたちが浮かんだ。学校生活の中で、学習や社会性でつまずきながら徐々に学習意欲が落ち無力になっていく姿を見てきた。自信を失い学校から零れ落ちていく子がいた。プログラミングなどの特化したものがあっても学習ができなければ認められないことに、私はズレを感じていた。この子たちはどうしたいのか、私たちは何ができるのだろうか。今まで、子ども達のできる事、やりたい事に対して、未熟な私達なりにできる限りのことを行なってきたが、いつも限界を感じていた。

このような子が認められる仕組みを作ろうとしていることを知り光が差した気がした。文部科学省が必要と感じている事をうれしく思った。

2. 学校改革実践研究報告 村上一美先生の「開く組織の協働探究」を読んで

村上一美先生の「開く組織の協働探究」問いをひらき、ズレを抱えながら応答し続ける[キーワード: 開く・協働探究・ズレ・応答・関係性]を読んだ。最優秀を受賞した方の実践研究報告を読みたかったからであった。そこにはうまくいかなかったことが随所に書かれていた。そして今の自分だったらこうしていたという事も書いてあった。まさしくズレを抱えながら応答し続けてきた姿だった。

私が今まで書きためてきた長期実践の文章はうまくいっていることを書いてきたと思う。しかし、考えてみれば私が立ち上げた「知的障害を伴わない発達障害に特化した事業」は、専門的に毎日支援が受けられる場所が欲しいと思い立ち上げた。今まで身近になかったから欲しいものを作ったのだ。お手本があったわけではない。だから素人の保護者の私がそんな簡単に出来るわけではないのだ。忘れてしまっていると思った。そこに自分自身にズレを感じた。どうして私は忘れてしまったんだろうという問いが立った。

20年余り前に遡ると、あの頃の心ある保護者達は講習などを聞きにいて学びまくっていた。保護者が自助グループを各所に立ち上げ始めていた。ことばを育む会親の会・自閉症の保護者が作った支援を学ぶ会、全国LD親の会福井たんぼぼの会、美浜の親の会などがあつた、素晴らしい講習会を聞いても保護者達は、「今日帰ってどうすればいいかは言ってくれない。明日どうしたらいいかを知りたいのに」、「見守りましょう、待ちましょうっていうけど、結局なにもしない事」と口々に言った。私は、発達障害の専門家は沢山いるのになぜ毎日支援してくれる場所がないのかズレを感じていた。絶対必要なのになぜなのか、問いが立った。そして気づいた。そんな場所を必要としているのは、保護者と当事者であつて、専門家ではない。だから存在しなかったのだ。欲しいと思う人間がつからなければ、生まれないのだ。調べてみると、他の障害の大きな事業所も始めは保護者が立ち上げていた。そんなことを考えていたのを思い出していた。心の中ではズレと問いの連続だった、あの頃を思い出していこうと思う。

3. 学校改革マネジメントとは

私はこれまで、支援の事ばかり考えてきた。教職大学院の学校改革マネジメントへは、AOZORAでの継続可能な支援の確立をしたくて来た。恐れ多いことで小さな事業所がマネジメントなど程遠いと感じていた。大きな学校の器の中で行われることと感じていた。

AOZORAの支援はトップダウンで積み上げて来た支援を全員が共通理解して同じように行うことで、子供の良い変化を得てきた。再現できない職員は、「子供が言うことを聞かない、なめられている」と相談がある。こんな旧体質の事業所にマネジメントの考え方ができるのかとズレを感じていた。しかし、村上一美先生の「開く組織の協働探究」を読んで、大きな学校の事だけでなく、職場の身近な事の気づきやズレを書いていた。それなら私もできるかもしれない。初めて身近に感じた。ある日、職員と子供たちのカルテを作る話し合いをした時、お互いの経験からの提案を出し合い、一つ一つのものが出来上がっていた。これは、一つ一つ話しあい積み上げてきたことが マネジメントに繋がると気づいた。トップダウンだけでなく開かれた組織になっているのではないかと感じた。ここも書いていきたいと思う。

4. 小さな特別支援のコミュニティ

昨年、コミュニティオブプラクティスを学んだ時に、発達障害に興味のある人たちと小さなコミュニティを作った。カンファの折、一緒に昼食を食べたり、カンファ後1階ロビーで話し合ったりしている。皆さん専門家なので勉強になっている。みんな忙しいので教職大学院に在籍する2年間限定になると思うが1年たった今でも細々と続いている。いつか経過を書きたい。

5. AOZORA カンファ

昨年から、教職大学院でカンファを受けて気づきがあり得るものが大きく、AOZORAでも行いたいと思っていた。そこで、7月1日、7月11日、10月23日、11月25日、12月16日、1月20日にAOZORAカンファを開催し、担当の先生方が来て下さった。担当の先生方が毎回来て下さった。行つた中で、教職大学院で行われるカンファと、AOZORAのカンファにズレが出てきた。AOZORAでカンファを行うことでパート職員の思いが聞けて良かったと言う職員がいてもっと機会を増やしたいと言う要望があつた。しかし、それは業務的なカンファであり 教職大学院の「気づく問いが立つ」カンファとは違つてくると私はかんじた。

そこにズレを感じた。AOZORAには看護師もいてカンファの経験がある。カンファとは何なんか問いが立った。

6. 結びに

4月の合同カンファで、より長期実践研究報告が具体的に見えてきた気がする。長期実践研究報告を書くことが目的ではあるが、そのことから気づきが

立ち上がりその上にまた気づきが積み重なって層になっている感じがする。今自分はどこにいるのか何をしたいのか学ぶほど分からなくなっている。1年間で振りかえりこんなに真剣に自分のやってきたこと考えたり気づいたりズレを感じ問いが立ち見つめ直していく事はなかった。一生に今しかないと思う。あとたった1年しかないこの貴重な環境に身を置けることに幸せを感じ大切に過ごしていきたい。

二年目の見え方

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井県立高志高等学校

市川 温都

1年前の自分と比べると、物事をすぐに答えだけで判断しなくなったことが、自分の中で大きく成長した部分だと感じている。以前は、授業や人との関わりの中で「正解」を求めすぎてしまい、うまくいかないことがあると必要以上に落ち込むことも多かった。しかし、教職大学院での学びや学校現場での経験を通して、教育には一つの正解があるわけではなく、子ども一人ひとりによって関わり方や伝え方も変わることをものすごく実感した。また、自分とは異なる考え方に触れる機会が増えたことで、相手の立場や背景を考えながら物事を見ることが少しずつできるようになったと思う。もちろん、まだ悩んだり迷ったりすることも多いが、以前よりも「まずやってみる」「考え続けてみる」という姿勢を持てるようになった。小さな経験の積み重ねではあるが、その一つひとつが今の自分の成長につながっていると感じている。

教職大学院2年目では、これまで学んできたことを、より実践につなげながら、自分自身の教師としての在り方を深めていきたいと考えている。1年目は、授業づくりや学校現場での経験を通して、多くの学びや気づきを得ることができた。その一方で、子どもとの関わり方や学級づくりについては、まだ悩むことや難しさを感じる場面も多く、自分自身の課題も見えてきた。だからこそ2年目は、ただ知識を増やすだけではなく、実際の現場の中で試しながら、自分なりに考え、学び続けていきたい。また、大学院で出会った仲間や先生方との対話も大切にしながら、さまざまな考え方に触れ、自分の視野を広げていきたいと思う。子どもたちに寄り添い、一人ひとりを大切にできる教師を目指して、日々の経験を大切にしながら、一歩ずつ成長していきたい。



お知らせ



福井大学教育学部附属幼稚園・義務教育学校
令和8年度

教育研究集会

第二次案内



令和8年6月12日(金) 8:10 ~ 16:30

会場:福井大学教育学部附属幼稚園・義務教育学校

幼稚園研究主題
好きが広がり、世界をひらく
幼稚園研究副題(2年次)
遊びにおける展開の可能性を探る

義務教育学校研究主題(第Ⅱ期)
探究し協創するコミュニティ
義務教育学校研究副題(3年次)
「物語る」を問う

本研究集会は、福井県教育総合研究所「専門性向上研修」を兼ねております。***「専門性向上研修」での参加希望の方は、福井県教育総合研究所HP内「Plant」からお申込みください。**

主催 福井大学教育学部附属幼稚園・義務教育学校

後援 福井県教育委員会 福井市教育委員会 福井県小学校教育研究会 福井県中学校教育研究会

附属義務教育学校

受付	児童生徒による オリエンテーション & ポスターセッション	公開授業Ⅰ +語り合い	公開授業Ⅱ	昼食	分科会 (後期課程生徒参加)	
8:10	8:50	9:45 10:00	10:55 11:10	12:00	12:50	14:15

公開授業Ⅰ(10:00~10:45) 児童生徒との語り合い(10:45~10:55)

教科/学級/授業者	主題 /「単元・題材」/ めざす授業
国語 5年2組 授業者: 齋藤 創	この文いる?から始まる説明文読み 「見立てる」「言葉の意味が分かること」 この説明文にこの文は必要?一文一文の役割を確かめたり、前後のつながりを比べたりしながら、筆者の考えを支え、読み手を納得へ導く文章構成の工夫とその効果に迫っていく。文章の内容を吟味しながら筆者の考えに迫り、それに納得したり問い返したりしながら自分の考えを深めていく授業。
社会 6年1組 授業者: 五十嵐 浩介	どうする?北陸新幹線の未来~100年後の日本をデザインしよう~ 「わたしたちの願いを実現する政治」 北陸新幹線が福井に開業して2年。なぜ、いまだに敦賀以西の延伸は決まらないのだろうか?延伸をめぐる様々な立場の人々の思いや願いにふれながら、立場の違いによる対立点に気付き、何を優先すべきかを判断していく。民主的な合意形成の在り方を考え、よりよい社会の実現に向けた政治の役割を実感する授業。
算数 4年1組 授業者: 結川 宏幸	小国旗を作って、海外の方たちを歓迎しよう 「角とその大きさ」「垂直・平行と四角形」 附属に来られる海外の方たちに喜んでもらいたい。国旗に描かれた形を正確にかくには、どうしたらいいのだろうか?辺の長さや角度の大きさ、平行や垂直を意識しながら、正確にかこうと試行錯誤する子供たち。算数を使って考えることよさに気付きながら、みんなで学ぶ価値を見出す授業。
理科 4年2組 授業者: 出口 翔太	空・地表・蛇口をつなぐ水の旅 「季節と生物・金属、水、空気と温度・雨水の行方と地面の様子・天気の様子」 私たちの使う水は、どこからやってきて、どこへ行くのだろうか?生活で使う水の行方を追いかける中で、水の性質や役割を明らかにし、その不思議さや、生命の源としてのかけがえのない価値に迫っていく。当たり前にある水、教科の枠を越えて多角的に捉え直すことで、地球規模で起きている水の循環が自分事になっていく授業。
音楽 6年2組 授業者: 中村 涼子	みんなで表現するとは? 「歌声をひびかせて心をつなげよう」 合唱を通して表現したい思いとは何だろう。「音の重なりや旋律の動き」と「歌詞」との関わりを探り、表現していく中で、自分たちの「思い」を創り上げていく子供たち。音楽表現を深める中で、自分たちの思いと向き合い、心をつなげる授業。
造形 1年1組 授業者: 笹川 英理	わくわくのみち 「すきなかたちやいろいろなあに」 教室までわくわく歩ける自分たちのみちってどんなだろう?これまで経験した材料や道具を試しながら、玄関から教室まで、自分の心がときめくものがいっぱいのみちをつくる。自分がつくったものを飾ってみんなの空間をつくり出していくことを楽しみ、お互いの表現のよさを認め合う授業。
体育 3年2組 授業者: 田中 大樹	みんなが主役!ラグベースボール 「体づくり運動 ベースボール型ゲーム」 勝利をつかむために必要な力は何だろうか?打つ・走る・守る…。自身のトレーディングカードから自分たちが勝利をつかむために必要な力を分析し、解決に向けて様々な方法を試していく。よりよい答えを探りながらベースボール型ゲームの魅力を多面的に捉える授業。
外国語活動 3年1組 授業者: 大野木 亘	I want to be friends with you! 「Unit 4 I like blue.」 「私は〇〇が好きだけど、クラスの友達やALT、海外の人はどうかな?聞いてみたいな。」子供たちは、好きなことや欲しいもの、普段することなど、自分のことを詳しく伝えたり、相手のことを聴いて反応を返したり質問したりして互いのことをより深く知っていく。英語でのやり取りを通して、互いのことを知り、つながる喜びを感じる授業。
技術 7年A組 授業者: 高井 茂嘉	みんなの『欲しい』をカタチに!学校生活に必要な製品をDIYしよう! 「材料と加工の技術」 学校生活に必要なものを、自分たちの手で創り出せないだろうか?学校の実態を調べたり、周りからの要望を聞いたりしながら、仲間と対話を繰り返し、みんなの願いをカタチに変えていく。ものづくりを通して、作る責任と価値に気付き、便利で豊かな私たちの生活を支える技術の役割について考えていく授業。

児童との語り合い(各教科の授業後10分間)

授業で見取ったことを、直接児童と語り合い、お互いの学びを深める時間として設定しています。ぜひ授業を受けていた児童と教科の学びについて語り合ってください。



分科会(12:50~14:15)

①各教科の分科会 会場:義務教育学校の各教室
 前期課程と後期課程の公開授業における子供たちの学びをもとにしながら、教科の学びについて教師と子供たちが語り合い、義務教育課程における協働探究の在り方について考えていきます。

②幼稚園の分科会 会場:義務教育学校
 実践を通じた園児の幼稚園での育ちについて協議していきます。
 分科会は3歳児・4歳児・5歳児合同で行います。



公開授業Ⅱ(11:10~12:00)

教科/学級/授業者	主題 /「単元・題材」/ めざす授業
国語 8年B組 授業者:杉川 嘉郎	再発見！説明的文章の魅力 「クマゼミ増加の原因を探る」 どうして筆者によってこんなに書き方が変わるのだろうか？本文と、これまで読んできた説明的文章との比較から、工夫の違いに気付き、文章に込められた筆者の意図に迫っていく子供たち。説明的文章に対する新たな見方、新たな価値を獲得していく授業。
社会 9年B組 授業者:北島 正也	戦争のない平和な世の中を創るために、私たちにできることを考えよう 「歴史的分野『近代の世界と日本』」 2026年になっても、世の中では戦火の炎が絶えない。国同士の対立は、本当に戦争でしか解決することができないのだろうか？当時の多様な立場を踏まえて近代の歴史のストーリーを見つめる中で、当時の人々の思いやその裏にある時代背景を探っていく。過去と現在を往還しながら、民主的な社会の価値を見出す授業。
数学 8年A組 授業者:竹内 俊力	ゲームの勝敗は時の運？！ゲームを面白くする確率とは？ 「場合の数と確率」 ポーカーなどのトランプゲームはなぜ熱中するほど楽しいのだろうか？既存のゲームをもとに新たな遊びを創り出そうとしながら、ゲームの面白さが緻密に計算された確率に基づくことを解き明かしていく子供たち。仲間と共にゲームの仕組みを紐解く過程で、起こりうるパターンを洗い出したり、確率を計算しながら勝ち筋を模索し、確率の奥深さに迫る授業。
理科 7年B組 授業者:松本 拓也	調理の最高条件を解明 「いろいろな生物とその共通点」「身のまわりの物質とその性質」 科学の視点から食材の最高の状態を引き出すことはできないだろうか？状態変化について時間と温度の関係など2つの要素をグラフ化し、食材ごとの最適な調理条件を追い求めていく子供たち。物質の状態を捉える視点を定性的から定量的へと昇華させ、生活に対する科学的な見方の有用性を感じていく授業。
音楽 9年C組 授業者:畑中 結衣	わたしたちの「最高」のGloriaを表現しよう 「曲想と詩や曲の背景との関わりを理解し、表情豊かに歌おう」 わたしたちにとっての「Amen」とは？これまでの先輩たちのGloriaと比べたり、曲想と詩や曲の背景との関わりを表現に生かしたりしながら、曲にふさわしい歌唱表現を探っていく子供たち。今この瞬間、この仲間と共に創る響きや表現を味わい、高めていく授業。
美術 9年A組 授業者:坂居 澄美	音を描く ～抽象の世界へ～ 「自分を表現する色」 心に響く音楽は、どんな色・形をしているだろう。自分の「大切な曲」をもとに、自分と曲との間に流れるエピソードを想起しながらイメージを膨らませ、世界観に合う表現を探っていく。時にやわらかく、時に鋭い、自由な抽象の世界に親しみを抱き、目には見えないお互いの感性を感じるとる楽しさを味わう授業。
家庭 7年A組 授業者:小寺 拓也	幼児の思いから形にする衣装づくりプロジェクト 「衣食住の生活『衣生活』」 幼児にはどんな服が適しているだろうか？幼児と「遊び」を通して関わる中で、思いや興味に寄り添い、対話を重ねながら、デザイン性だけでなく機能性や安全性を両立した衣装づくりを進めていく。幼児にとって理想な服を探っていくことで、衣服によって生活が支えられていることに気付いていく授業。
保健体育 7年C組 授業者:田中 孝治	9人で生み出せ ビッグイニング！ 「ベースボール型(球技)」 チームでより多くの得点をとるにはどうすれば良いだろう。打ち方やチームとの関わりにおける、自分にとっての「最適」を探り、結成した9人で大量得点の獲得を目指す子供たち。ベースボール型の魅力に触れる中で、チーム内の自他の役割や特性を見つけ、生かし合う授業。
英語 8年C組 授業者:伊藤 江莉奈	Let's talk about our "best" jobs! 「Unit 3 What kind of job are you interested in?」 自分にとって、1番「びったりな」仕事ってなんだろう。自身の興味や関心だけではなく、客観的な情報を「なぜ？」という疑問を用いて聴きながら、自分の将来像について語り合う子供たち。将来の職業選択に関する対話の中から、子供たちが自分や相手のよさを問い直していく授業。

附属幼稚園

受付	オリエンテーション	公開保育	公開授業Ⅱ (義務教育学校)	昼食	分科会 (3、4、5歳児合同)
8:10	8:50	9:00	10:55	11:10	12:00
					12:50
					14:15

保育者	主題 / めざすあそび
あそび 年少/年中/年長 保育者: 上田晴之 瀬戸真世 前田祐子 血原正紘 立壁葉子 廣瀬友加里	年少「はやくあそびたい」 一人一人が安心して過ごせる環境の中で、新たなもの・こと・人・遊びに自ら出会い、自分を出しながら遊びを楽しんでいく。周りの子の遊びにも興味を向けながら、自分の好きな遊びを見つけていく。教師と一緒に遊んでいる子の思いを伝えようとし、いろいろな遊びに自ら関わり楽しく遊ぶことを目指す。 年中「いっしょにあそぼ」 好きな遊びを楽しむ中で、自らやりたいことに出会い、気付きを重ねながら面白さや不思議さを友達と一緒に味わっていく。その中で、友達の思いや気付きに触れながら、遊びをとことん楽しんでいくには？周囲の環境との関わりの中で、自分を出しながら遊ぶことを目指す。 年長「ちからをだして」 自分のやりたい遊びに意欲的に取り組む中で、目的に向かって挑戦したり、友達の「好き」に共鳴したり、一緒に相談したり、協力したりしながら探究する面白さを味わっていく。その中で、もの・こと・人との出会いや気付きを重ね、試行錯誤しながら遊びを展開していくには何が大切なのか。遊びを通して自己発揮し、自分の身の回りの世界、そして未来へ期待感を持てるような保育を目指す。

全体会・シンポジウム (14:30~16:30)

テーマ「学びを物語り、拓く未来」



秋田 喜代美 氏



鹿毛 雅治 氏



牧田 秀昭 氏

シンポジスト

学習院大学文学部 教授

慶應義塾大学教職課程センター 教授

本校 統括研究主任

コーディネーター

福井大学連合教職大学院客員教授


秋田 喜代美 氏

鹿毛 雅治 氏

河合 創

牧田 秀昭 氏

子供たちは、あらゆる事象や材と関わり、問いかけ、語り合う中で、その意味や価値を捉え直していく。教師は、その子供たちの歩みに寄り添い、見取り、彼らのまなざしの先を共に見つけ、個々のストーリーを編み込みながらコミュニティの学びを支え、その発展を試みる。幼稚園から義務教育学校の12年間の協働探究を通して、子供たちの多様性が生かされ、物語られる学びがどのような未来を拓いていけるのか。ご参加いただいた皆様とともに、子供の学びの姿から、これからの学校教育の在り方を考えていきたいと思います。

 シンポジウム生配信のお知らせ
 オンライン(Zoom)にてシンポジウムの様子を配信します。ご希望の方は下記二次元コードよりお申し込みください。後日、ID、パスワード等をメールにてご連絡いたします。



本校の教育実践、最新の教育研究をまとめた本が発売されました！

「教える専門家」から「共に学び合う専門家」へ——福井大学教育学部附属幼稚園・義務教育学校の「12年間」の育ちを見据えた校種を超えた実践から、教育の新たな可能性を探る。子どもと保育者・教師が共に探究することを通して、「学び」をつなぎ「文化」を創造する。それを可能とする専門性とは。

当日、会場で特別価格でお求めいただけます。

資料代 500円

※参加される方は、ご昼食を各自でご準備ください。
 ※研究紀要はPDFで配布します(後日パスワード配布)。冊子での購入希望の方は、受付でお申し出ください。
 ※申し込み方法: 右の二次元コードより必要事項をご記入の上、お申し込みください。

福井県教育総合研究所の「専門性向上研修」の申込は、本フォームではできません。

申し込み締切
 令和8年
5月29日(金)

申し込み用 二次元コード



<https://forms.office.com/r/z9SAwNpYbr>

問合せ先: 担当: 河合 創(義務教育学校)・上田 晴之(幼稚園)
 〒910-0015 福井県福井市二の宮4丁目45-1 Email: fuzoku-j@f-edu.u-fukui.ac.jp
 TEL 0776(22)6985 FAX 0776(22)6703
 HP: <https://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~fuzoku-g/>

Schedule

- 5/16 Sat.** 5月月間合同カンファレンス **A** 日程
5/23 Sat. 5月東京カンファレンス
5/30 Sat. 5月月間合同カンファレンス **B** 日程
7/4,5 Sat, Sun. 実践研究福井ラウンドテーブル **2026 Summer Sessions**
7/11 Sat. 7月月間合同カンファレンス **A** 日程
7/18 Sat. 7月月間合同カンファレンス **B** 日程
7/25 以降 夏期集中講座 **Cycle1(a:7/25,26,27), (b:7/28,29,30)**
Cycle2(a:8/1,2,3), (b:8/4,5,6)
Cycle3(a:8/8,9,10), (b:8/17,18,19)



Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。関心がある方は、dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp までご連絡ください。



【編集後記】

新年度が始まり早1ヶ月が過ぎました。2日間の4月月間カンファレンスだったと思いますが、いかがでしたでしょうか。

M1の皆様の漲る意欲を、このニュースレターの原稿からも感じることができました。また、M2・3の皆様からはこれまでの学びや多様な実践を通して、理論と実践を往還しながら成長されていく姿が印象的でした。皆様、是非ご一読ください。(T.N)

教職大学院 Newsletter **No.207**

2026.5.30 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院 福井大学・
岐阜聖徳学園大学・富山国際大学
連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp